

# 仲 田 遺 跡

一般国道52号(甲西道路)改築工事

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中部横断自動車道建設工事

2001・3

山 梨 県 教 育 委 員 会  
國土交通省甲府工事事務所  
日本道路公団東京建設局

# 仲 田 遺 跡

一般国道52号(甲西道路)改築工事

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中部横断自動車道建設工事

2001・3

山梨県教育委員会

国土交通省甲府工事事務所

日本道路公団東京建設局

# 序

本書は山梨県埋蔵文化財センターが平成11年度（1999）に実施した仲田遺跡発掘調査の調査報告書であります。

本遺跡は御勅使川扇状地にあります。西郡筋と呼ばれるこの周辺地域は歴史の上では中世の八田庄（牧）の所在地に比定される地域ではありますが、洪水の多発地域であり、古い時代の遺跡の所在は薄いとされてきました。しかし、ここ数年の発掘調査により奈良・平安時代から中世・戦国期の集落の跡やそれに関連する遺構・遺物が検出され、従来の見方を改めるとともに、当時の人々の営々たる生活の足跡を確かめることになりました。しかし、当時の生産活動、とりわけ水田農耕については、平成3年度に調査が行われた大塚遺跡で水田跡が一部検出されてはいるものの、徳島堰の開削等により広域にわたる灌漑が可能になった江戸時代前期後半以前のありさまを伝える具体的な資料が少なく、明らかにする術がありませんでした。当時の水田跡を確認した本調査の意義はそこにあると考えます。

度重なる土砂の流入のためか水田は厚い砂礫に覆われ、畔に損壊が各所で見られたり、検出された遺物もほとんどが遺跡外からのものと考えられるため時期の特定が困難であったりと思うよう<sup>う</sup>に調査を進めることができない経過もありました。しかし、畔、足跡、道など水田の姿を伝える遺構から稻作の実際を想定することが可能になったことや、旧地形とその利用について検討が加えられたことは、大変意義深いことだと考えております。さらに、検出が続いている周辺の集落遺跡と本遺跡との関わりに考察をすすめることは、前述の歴史上の問題にも少なからず示唆を与えることが予想され、興味深く、今後の調査研究に期待したいところであります。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係者、関係機関ならびに調査・整理作業に従事された方々には深甚なるお礼を申し上げる次第であります。

2001年3月

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 大塚 初重

## 例 言

- 1 本書は、一般国道52号線（甲西道路）改築・中部横断自動車道建設工事に伴い発掘調査が行われた山梨県中巨摩郡八田村野牛島に所在する仲田遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は、山梨県教育委員会が国土交通省ならびに日本道路公団より依頼を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施したものである。
- 3 調査期間は1999（平成11）年5月6日から同年10月18日までである。
- 4 本書の執筆は山本茂樹・湯川修一が担当し、編集は山本が行った。なお第4章は（株）パリノサーベイに委託し、第5章は山梨文化財研究所の河西学氏に原稿を賜った。
- 5 遺構・遺物の写真撮影は山本・湯川が行った。
- 6 空中写真の撮影と遺跡全測図の作成については（株）シン技術コンサルに、骨齒の同定は（株）パリノサーベイに、また、土壤の成分分析ならびに金属製品の保存処理は山梨文化財研究所に委託した。
- 7 本書にかかる記録図面、写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 8 発掘調査から報告書作成に至る過程で次の方々のご指導・ご教示を賜った。記して謝意を表す（敬称略）。  
石川博文、斎藤秀樹（以上 八田村教育委員会）清水郁夫（八田村デイサービス福祉館）

## 凡 例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は次のとおりである。  
各区全体の遺構 1/200、遺物位置図 1/200、平面図 1/80、石列を伴う道の断面図 1/60、断面図 1/60、3区の縦による構築物の平面・立面・断面図 1/60、旧河道の遺物は1/3を基本にするが、古錢については1/2である。
- 2 □のスクリーントーンは旧河道の部分を表す。
- 3 遺構図版において北を示す方位はすべて座標北を示す。
- 4 遺構位置図に使用したドットマークは各図中に示した通りである。
- 5 遺構および遺構写真的縮尺は統一されてはいない。

## 目 次

### 序・例言・目次

### 仲田遺跡調査成果ダイジェスト

第1章 調査の概要	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査組織	4
第3節 調査日程	4
第4節 調査方法	4
第5節 普及活動	5
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	8
第3章 遺構と遺物	11
第1節 遺構（1～3区）	11
第2節 出土遺物	14
第4章 仲田遺跡出土骨齒の同定	25
第5章 仲田遺跡を構成する堆積物の岩石鉱物組成	40
仲田遺跡の水田について	43
写真図版	46

# 砂礫に埋もれた 中世の水田跡

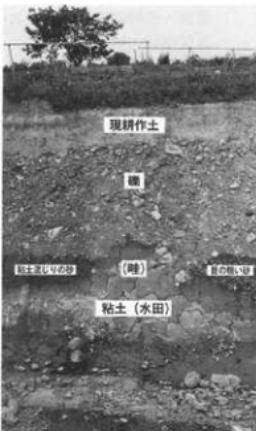
〈仲田遺跡発掘調査 成果ダイジェスト〉

仲田遺跡は甲府盆地の西部、八田村野牛島にあります（P 6 第2図参照）。ここは御勅使川扇状地の扇端部北東縁にあたり、遺跡の北約250mを御勅使川が東流しています。遺跡は現在の野牛島集落の北、周辺から一段下がった浅い谷状の窪地にあります。発掘調査は国道52号線（甲西バイパス）改築ならびに中部横断自動車道建設工事に先立ち行われました。調査の結果、地下150cmほどから水田、旧河道（かつて川が流れているところ）、道の跡などが検出されました（※ 調査は1～3区の3つの調査区を設定して行いました。各区の設定についてはP 5 第1図参照）。

## 1 土層は語る

土層とは堆積した粘土、砂、礫など異なる土の重なり合い具合のこと。3区北法面（掘削により形成された側壁面）の土層を撮影したのが右の写真です。下の方に見えるひび割れた粘土層が水田。粘土層中央の丸い盛りあがりが畔の跡です。この水田面の上に砂や礫が厚く堆積しているのが観察されます。礫の層は比較的粒が大きく、大ぶりの石も混じっています。ここから判断すると、これは短期間で多量に流れこんだ状況、すなわち洪水が繰り返された結果であると考えられます。

では、水田が埋没により放棄せざるをえなくなったのはいつのことでしょうか。遺跡の周辺ならびに東南方向を実地に観察すると、それ以前の扇状地が富士川（釜無川）の浸食を受けて形成された平地の上に新たな堆積土が舌状に乗り、互いに重なり合っていることがわかります（P 7 第3図参照）。この小さな扇状地の形成は、かの“信玄堤”構想と関わりがありそうです。これは、ご存じのように甲府盆地の水害を防ぐことを目的としたものです。そして、その工期が信玄治世の戦国時代から江戸時代初期に及んだとされる一大治水事業です。御勅使川についてはその河道を北に付け替え、堅固な岩盤である高岩にその流れをぶつけ、水勢を弱める工事が行われました。現在の御勅使川はこうしてできたものであり、遺跡の北には新たな河道を通すために龍岡台地の南端内側を開削した「堀切」が見られます。小さな扇状地の形成はこの新たな川筋の氾濫によるものであると考えられます。砂礫の中から見つかったものに江戸末期の銭、文久永宝があります。この地に安定した耕地が確認されるようになるのは明治時代になってからです。



## 2 水田に残された足跡

水田面にはいろいろな痕跡が残ります。畔、稲株、もみがら、足跡、耕作痕などなど。こここの水田には当時の足跡と畔が残されていました。

下の写真は2区東側を撮影したものです。ここでは深く沈み込んだ形の足跡が連続し、全体としては筋状に残されていました。ぬかるんだ水田での困難な作業をおもわせます。足の方向が進行方向に対して直角に近く、横歩きをおもわせる状況から刈り取りに伴うものである可能性が考えられます。足跡の筋の間隔は1m前後です。ここを歩きながら、手を伸ばして稲穂列の両側から2~3株ずつ収穫したのでしょうか。



深く沈みこんだ足跡

ここに残された畠は水田の長辺側のもの（大畠）とみられますが、真っ直ぐではなく、ゆるやかに曲がっていました。畠を曲げたのは、土地の傾斜に合わせたからでしょう。足跡の筋はこの畠に交差する方向にならんでいました。曲がった畠を辿って、稲株の列を増やしていくと、どこかで列の方向を調整する必要がでてきます。足跡の方向が途中で変わるのはこのことと関わりがあるのではないかでしょうか。

## 3 田中の一本道



1区西側に南北方向の道（左の写真）が見つかりました。幅はおよそ2m。道の両側には石列がならび、その底は砂礫を入れ、踏み固めた状況が見られます。この道は東西にのびる畔を中断し、旧河道で一時途絶えながらも遺跡外に延びている形跡があります。道筋を南に延長すると旧諏訪神社（社殿は南に移転し、現在は石碑が残る）の脇に至ることが観察されます。参道であった可能性がここから浮かび上がってきます。また、遺跡の東脇を江戸時代には「甲府道」という地域的な街道が通過していたことが知られています。この道の起源は江戸時代以前に遡る可能性が高く、関わりを考える必要があります（第2章第2節を参照）。

## 4 水田調査の難しさ

洪水により埋もれたことが遺跡を残したこととも確かです。しかし、その力が破壊の痕跡を各所に残しています。右の写真は畔の一部が砂礫により切り崩された状況です。

また、遺跡の営まれた時期の決定が困難です。出土遺物の大半は洪水などにより遺跡の外部から流れこんだものと考えられるからです。水田面やその直上から北宋錢（中国北宋時代の銭貨。12世紀後半頃から輸入が始まった）、刀子（小刀）、天目茶碗・灰釉陶器・青磁片などの陶磁器、かわらけ（素焼きの皿）などが検出されたことから、少し幅が広いですが鎌倉時代～戦国時代（12世紀末～16世紀）頃を考えています。西隣の石橋北屋敷遺跡から類似の遺物が出土していることは有力な情報ですが、やはり、決定とは言いきれないのが実状です。



## 5 調査を終えて

「扇状地で水利に恵まれず、また、御勅使川の度重なる洪水に悩まされてきたこの地域で水田耕作が普及したのは河川に治水工事が進み、さらに徳島堰など新たな用水路の恩恵を受けて広く灌漑が可能になった江戸中期以降である。」これが従来の考え方でした。しかし、ここにはそれ以前の水田耕作の跡がありました。御勅使川の付け替え前は川筋から離れ、被害を受けることが少なく、土地が安定していたことが一番の理由でしょう。また、検出された旧河道が水田を潤していたことも考えられます。

また、近年の発掘調査で周辺地域から奈良・平安時代から戦国期にかけての集落跡やそれに関連する遺構が相次いで確認されています。ここで暮らす人々の生業が何であったのか、その1つに水田耕作があったことをこの遺跡は投げかけています。「御勅使川扇状地北部における中世集落の形成に伴い、経営された水田の遺構である。」仲田遺跡はこのように位置づけることができるのではないでしょうか。

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

一般国道52号線（甲西道路）改築・中部横断自動車道路双葉工事区（双葉～白根間）の建設工事に先立ち、平成10年12月、県埋蔵文化財センターによる試掘調査が実施された。その結果、計画路線内の八田村野牛島地内において、水田面に伴うと予想される畦畔状遺構数条ならびに中世のかわらけ片が検出された。この試掘調査の成果をもとに、国土交通省ならびに日本道路公团および県教育委員会学術文化財課と県埋蔵文化財センターで協議を行い、翌平成11年度に本調査を実施することが決定された。なお、遺跡の名称は所在地の中心的な字名「仲田」をあて、命名した。

調査は平成11年5月6日（木）から10月18日（月）までのおおよそ5ヶ月を要した。また、整理作業は発掘調査終了後から翌平成12年度に亘り、本書の刊行に至った。

## 第2節 調査組織

調査主体	山梨県教育委員会			
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター			
調査担当者	山本 茂樹（埋蔵文化財センター 副主査 文化財主事） 湯川 修一（ 同 副主査 文化財主事）			
作業員・整理員	今津 武男	遠藤 實雄	大森 玲子	大久保志保
	小野 節子	河住 照雄	河住 博	河住ふさ子
	久保田明義	佐野 真雪	澤登 由美	瀧澤かねじ
	根津 育美	根津 弘子	原 美三江	原田みゆき
	樋口 京子	樋口 啓子	樋口瑞穂子	深澤 圭介
	深澤 照明	深澤 徳子	三好 美智	山田 春子
	依田 友弘	渡辺 俊夫	(50音順)	

## 第3節 調査日程

平成11年5月6日（木）～6月3日（木）	重機による表土除去作業
5月14日（金）	現場事務所設営
5月14日（金）～10月7日（木）	手掘りによる遺構面（水田面）の確認 出土遺物の取り上げ 遺構実測・写真撮影
8月4日（水）5日（木）	航空撮影・測量（1・2区）
10月7日（木）	航空撮影・測量（3区）
10月8日（金）～14日（木）	水田面の掘り下げ（状況の確認）
10月12日（火）	土壤分析のためのサンプル採取
10月15日（金）18日（月）	調査完了・現場撤収

## 第4節 調査方法

調査範囲は東西約150m、南北約40m、面積約7,300m<sup>2</sup>で、道路幅の調査であるため、その全体は緩やかなカーブを伴った短冊状を呈する。道路建設用地以前はおむね水田であった。遺構確認面は現状地から地下150cmほどに広がっていた。その直上まで重機により現耕作土や砂礫などの覆土を取り除いたが、その際、①調査範囲内を走る農業用水路を保持するため、その両側1m強を帯状に残す ②法面の崩壊を押さえるため、安定勾配を施す

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

一般国道52号線（甲西道路）改築・中部横断自動車道路及工業工事区（双葉～白根間）の建設工事に先立ち、平成10年12月、県埋蔵文化財センターによる試掘調査が実施された。その結果、計画路線内の八田村野牛島地内において、水田面に伴うと予想される畦畔状遺構数条ならびに中世のかわらけ片が検出された。この試掘調査の成果をもとに、国土交通省ならびに日本道路公団および県教育委員会学術文化財課と県埋蔵文化財センターで協議を行い、翌平成11年度に本調査を実施することが決定された。なお、遺跡の名称は所在地の中心的な字名「仲田」をあて、命名した。

調査は平成11年5月6日（木）から10月18日（月）までのおおよそ5ヶ月を要した。また、整理作業は発掘調査終了後から翌平成12年度に亘り、本書の刊行に至った。

## 第2節 調査組織

調査主体	山梨県教育委員会			
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター			
調査担当者	山本 茂樹（埋蔵文化財センター 副主査 文化財主事） 湯川 修一（ 同 副主査 文化財主事）			
作業員・整理員	今津 武男	速藤 實雄	大森 玲子	大久保志保
	小野 節子	河住 照雄	河住 博	河住ふさ子
	久保田明義	佐野 真雪	澤登 由美	瀧澤かねじ
	根津 育美	根津 弘子	原 美三江	原田みゆき
	樋口 京子	樋口 啓子	樋口瑞穂子	深澤 圭介
	深澤 照明	深澤 徳子	三好 美智	山田 春子
	依田 友弘	渡辺 俊夫	(50音順)	

## 第3節 調査日程

平成11年5月6日（木）～6月3日（木）	重機による表土除去作業
5月14日（金）	現場事務所設営
5月14日（金）～10月7日（木）	手掘りによる遺構面（水田面）の確認 出土遺物の取り上げ 遺構実測・写真撮影
8月4日（水）5日（木）	航空撮影・測量（1・2区）
10月7日（木）	航空撮影・測量（3区）
10月8日（金）～14日（木）	水田面の掘り下げ（状況の確認）
10月12日（火）	土壤分析のためのサンプル採取
10月15日（金）18日（月）	調査完了・現場撤収

## 第4節 調査方法

調査範囲は東西約150m、南北約40m、面積約7,300m<sup>2</sup>で、道路幅の調査であるため、その全体は緩やかなカーブを伴った短冊状を呈する。道路建設用地以前はおおむね水田であった。遺構確認面は現状地から地下150cmほどに広がっていた。その直上まで重機により現耕作土や砂礫などの覆土を取り除いたが、その際、①調査範囲内を走る農業用水路を保持するため、その両側1m強を帯状に残す ②法面の崩壊を押さえるため、安定勾配を施す

の2点に留意した。また、調査範囲は2本の水路により分断されていたので、それを境界にして、1~3区の3つの調査区(第1図を参照)を設定した。

遺構確認は人力による手掘りを原則にした。また、光波測量器を設置するために、調査範囲の周縁部に基準杭を4本打った。基準杭(基準点)のそれぞれの国土座標は次の通りである。遺物の取りあげにあたっては、調査区内に杭打ちをすることはせず、測量データをコンピュータに記録させる方法を探った。

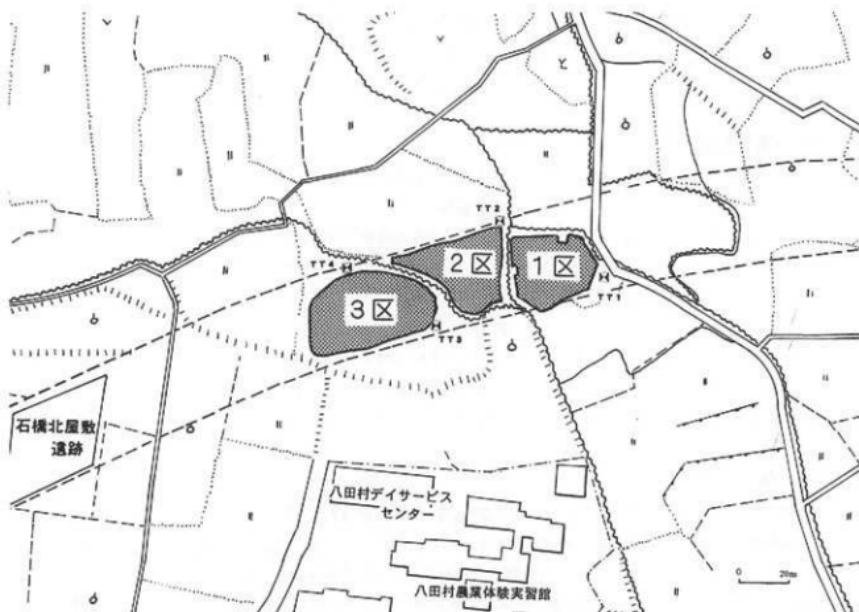
また、どの川筋から砂礫が流れこんだのかなど新たなデータが得られることを期待して、成分分析のための土壤サンプルを数ヶ所採取した。

〈基準杭の国土座標〉

	X	Y	Z
T T 1	-36911.660	-1515.667	320.774 m
T T 2	-36889.159	-1559.053	322.011 m
T T 3	-36935.722	-1587.087	322.150 m
T T 4	-36913.060	-1626.759	323.615 m

## 第5節 普及活動

遺跡説明会(平成11年10月23日 白根高校)や遺跡展(平成12年3月18日~4月9日 県立考古博物館、その後県内4会場にて巡回展を開催)などの機会に本遺跡の紹介や情報発信に努めた。



第1図 遺跡地区図ならびに周辺の土地利用 (1/2000) (図中の■は基準点～は主な農業用水路)

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

仲田遺跡は甲府盆地の西部、中巨摩郡八田村野牛島に所在する。ここは御動使川扇状地の扇端部北東縁にある。御動使川扇状地は赤石山脈の前山をなす巨摩山系から流れ出した御動使川が山間地を抜けた塙前付近を扇頂に扇端部の富士川（釜無川）河岸まで東西長約10km、扇端裾部は南北幅約15kmに及ぶ広域の扇状地である。本遺跡付近は標高320m前後。扇端部であるが、掘削すると地下水位はまだ低く、周辺では本遺跡の南100mほどの能藏池を除くと地上への湧水は観察されない。そのため、ここは、県内有数の果樹生産地帯として知られる八田村の中では水田が広がる地域ではあるが、水利は御動使川から導いた農業用水路に頼っている。また、遺跡の北約250mを御動使川が東流している。ここには流路変更のためにくさび形に突き出た龍岡台地南端部内側を人为的に開削した「堀切」が見られる（開削の経過については次節参照）。

御動使川は「堀切」の約1km下流で高岩と称される堅固な岩盤にぶつかるよう釜無川に合流する。釜無川は合流点付近で流路を南向きに変え、扇状地の裾部をあらうように流下する。

現地付近を地上観察すると、北に赤山と称される島状の微高地（「堀切」により龍岡台地から分離）、南には釜無川の浸食崖から本遺跡の南辺に回り込むように一段高くなった状況（この後、段差は西方へ連続 第3図参照）が見られ、その狭間の窪地が仲田遺跡の立地であることがわかる。この窪地は北西から南東方向に下る緩斜面状を呈する。

仲田遺跡が厚い砂礫に埋もれていることは掘削により確かめられた。そこで、本遺跡周辺の地形を把握とともに、遺跡埋没の経緯を推察するため、周辺地域の地形分析を行ってみた。分析ならびに地形分析図（第4図）の作図は、県企業局等発行の地形分類図をベースに、1947年米軍撮影の40000分の1ならびに75年国土地理院撮影の10000分の1の航空写真の判読と実地踏査で微地形を確認しながらすめた。

その結果、周辺の地形は①八ヶ岳火山地②御動使川扇状地③2次的な小扇状地に大別されることがわかった。①は蘿崎火山岩屑流と称される更新世の火山噴出物によるもので、釜無川右岸の龍岡台地や左岸の高岩を含む双葉町の台地など低地性の台地を形成している。遺跡付近では赤山や能藏池付近にスポット的な表出が見られる。ただ、この火山岩屑流は御動使川扇状地や甲府盆地の地下に広範に分布することが知られている。②はこの地域の典型的な地形であり、その基本的な土質は砂礫である。③は釜無川の浸食を受け、形成された河床平野上に新たな砂礫が流入したことにより形成されたものであるとおもわれる。遺跡東南の平地を歩いてみると、堆積土が舌状に乗り上げて形成されたとみられる段差が耕地の境界に利用されて残存しているのが観察される（第3図参照）。この新たな小扇状地の形成過程は次のように考えられる。

この形成に大きな影響を及ぼしたのは現河道への御動使川の付け替え工事（戦国時代から江戸時代初期 次節参照）であると推察される。旧来の河道は現在より南（おおよそ保道竜王～芦安線上 第3図参照）にあり、当初はこの下流に小扇状地が形成されたのであろう。この時期、本遺跡付近は洪水に見舞われることが比較的少なく、土地の安定が確保されたため、耕地が開かれたとみられる。ところが付け替え工事の後、新河道から多量の砂礫が流入するようになり、比較的短期間に逆流の景観が一変したのであろう。砂礫の流入路は①「堀切」から下流部へ、②遺跡のある窪地を辿っての2筋（第3図参照）が想定され、洪水の繰り返しが重層的な堆積状況を形成したとみられる。この2つの流入路の内、②の流れにより本遺跡は埋没したと考えられる。砂礫中から検出された最も新しい時期の遺物は江戸時代末期に鋳造された文久永宝である。また、現地が再び田地化していることが、明治24年発行の地籍図で認められる。このことから砂礫の流入は江戸時代のほぼ全時期に亘り、その間現地付近は耕地の保持が困難であったこと、現河道の安定と治水施設の改良に伴い、漸次それがはかられたことが



第2回 八田村の位置

推測される。

仲田遺跡の南半部に旧河道跡が検出された。これは、前述の通り、御勅使川の付け替え工事以後、砂礫の流入路となったことは間違いないが、川筋はそれ以前から存在していた可能性が予想される。また、この古河川が検出された水田を潤していたことも考えられる。

古い時代の河道については、平成7年度に調査が行われた大塚遺跡の調査報告（第4章第3節）で指摘されている。そこでは、北西から流れこむ割羽沢川の旧河道である可能性、付け替え工事前も本流から分岐した補助的な河川が存在した可能性などが示されている。大塚遺跡の所在地付近から本遺跡の南縁に小規模な段丘を形成しながら延びる段差（第3図参照）も注目される。その辺りの事情を明らかにしていくことは今後の課題であろう。



第3図 砂礫の流入経路（想定図）

・仲田遺跡 →流入経路 ..... 小扇状地の範囲  
 ▨釜無川の浸食崖 ▨段差（小崖）



第4図 周辺地域の地形分類図

● 仲田遺跡 火山堆積物台地 扇狀地 小扇狀地

## 第2節 歴史的環境

仲田遺跡が立地する西郡筋（御勤使川以南の釜無川右岸地域）はおおむね御勤使川扇状地上にあるため、水利に恵まれず、その上、御勤使川の度重なる氾濫の被害を受けてきた地域である。乾燥した草地での牧畜が主要な生業であったとされてきたが、そのような事情から古い時代の遺跡は希薄であるという認識が一般的であった。しかし、近年の発掘調査によって、この認識は改められつつある。以下、調査の概要を略記する。

- ・大塚遺跡（1）…平成7年度調査。古墳時代前期から奈良・平安時代の住居が30件以上発見された。また、中世に比定される水田跡から内耳土器片、陶器片を検出、水路とみられる溝状遺構も検出された。
- ・石橋北屋敷遺跡（2）…平成9～10年度調査。本遺跡に西隣する。奈良・平安時代の住居、鎌倉・室町時代の道路遺構、戦国時代の区画溝が検出された。本遺跡の時期を想定する上で参照すべき遺跡である。
- ・立石下遺跡（3）…本遺跡と平行して調査を実施（百々遺跡も同じ）。平安時代の住居、溝状遺構、炭窯跡を検出。奈良三彩（小壺片）の出土は県下で2例目
- ・百々遺跡（4）…200件近い住居が密集する平安時代の大集落跡。鍛冶関連施設や馬の祭葬をおもわせる状況など様々な情報がもたらされた。また、『甲斐国志』など古記録に残る八田庄（牧）に関係する遺跡として注目されている。

このような成果から、古代から集落の形成と人々の営みが継続してきたことが明らかになってきた。また、大塚遺跡での成果と合わせ推察するに、全面的には言い難いまでも、稲作の展開は確実である。

仲田遺跡はこのような集落の形成と発展に伴い開発された水田跡ととらえることができよう。仲田遺跡の東脇を通過する現村道（96号）は江戸時代、甲府道（甘利道、すむじ街道の別称あり）と称した地域的な街道の推定期とされている（路線は第5回参照）。この道は武川筋（御勤使川以北の釜無川右岸地域）・西郡筋と甲府を結ぶ要路であった。また、庚申塔のある新居（居村、野牛島地内）でこの道から分岐・南進する市川道は陣屋や富士川舟運の河岸の所在地であった市川大門や駿沢に至る物流道路としてこの時期に整備された経過がある。ただ、道筋にはそれ以前に起源があるとみられる史跡・古刹が並んでおり、道の存在はさらに時代を遡るとおもわれる。

- ・旧源助神社跡地（5）…本遺跡南隣の段差上にあたる。由来書では社の開基は永祿4（1561）年。ここから石橋北屋敷遺跡までを古称「古屋敷」といい、野牛島集落の発祥地とされる。社殿は南250mに移転していて、跡地の傍らに現在は記念碑が建っている。
- ・鎌倉御所五郎丸の墓（6）…現在の源助神社境内にある。五郎丸は鎌倉時代初頭、源頼朝の勘気に触れ、野牛島に配流されたと伝えられる人物。この配流には当時、現在の蘿崎市南部を基盤にした一条氏（甘利氏）が関わったとされ、この辺りまではその勢力圏であったとみられている。
- ・長谷寺（7）…複原にある。開祖は行基と伝えられるが、棟柱の墨書きは大永4（1524）年を記す。室町時代の様式を示す本殿は国重要文化財。
- ・長盛院（8）…釜無川の浸食崖上にある。もとは武田家臣で徳永付近に拠った金丸氏の居館の所在地。
- ・土屋惣蔵昌恒の墓（9）…土屋氏は金丸氏の分家筋にあたる。惣蔵は武田勝頼に仕え、天目山の戦いで「片手千人切り」で知られる。

ここから中世の名主・豪族層の台頭とその勢力拡大、それに伴う交通の重要性の高まりが推察される。仲田遺跡内、村道の西約30mからは同時期とみられる南北方向の遺跡が検出されている。

現在の御勤使川の流路や護岸、また前御勤使川との分岐点付近には戦国時代から江戸時代にかけて築かれた治水施設が遺跡として残る。これらは釜無川治水事業（いわゆる「信玄堤」構想）の一環として行われた御勤使川の付け替え工事によるものである。この工事により現在より南（前節 第3回参照）を流れていた川筋は現在の流路に変更されることになった。流路変更のための施設である白根将棋頭（10）下条南割将棋頭（11）の2遺跡は残存状況がよく、上流の石積み出し遺構と合わせて、「御勤使川旧堤防」の名称で国指定史跡の答申を受けている。また、十六石（12）は釜無川との合流点付近に巨石を並べ、水勢を弱める働きをしたとされる。仲田遺跡の北には「堀切」（13）が見られる。川筋を堅固な岩盤である高岩に向けるための開削は幅18間（約34m）と古記録は伝え

るが、現在の河原幅は50m近くに達している。この開削工事は本遺跡の埋没に少なからず影響を与えていたと考えられる（前節を参照）。なお、河道の付け替え後、野牛島集落（村）は漸次南遷して現在地に至り、以後、寛文年間に江戸の商人徳島兵左衛門の尽力で開削された徳島堰等から用水を得て、西郡筋有数の村に成長した。

仲田遺跡の北、「堀切」の手前に赤山(14)がある。石礫（黒曜石）の散布地とされ、縄文土器発見の記録もある。「堀切」により島状に分離しているが、地質的には龍岡台地に連続している。『韮崎市誌』所収の縄文式土器分布図には、この台地上に下馬城(15)、羽根前(16)、長塚道下(17)の3遺跡が記されている。これらの遺跡の出土品は縄文中期のものが中心であるが、赤山も同時期の遺跡とみられる。なお、仲田遺跡で砂礫を掘削中、打製石斧1点、黒曜石片数点を採集することができた。※（ ）内の数字は第5図中の遺跡番号に対応する。

※仲田遺跡の発掘調査後の平成11年11月から平成12年2月にかけて、八田村教育委員会により遺跡分布調査が行われた。その結果は平成12年3月に刊行された『村内遺跡詳細分布調査報告書』に記載された。この調査により、多くの遺跡が新たに確認された。そこで、本文中の遺跡を合わせ、村内の遺跡を別表に掲載し、その所在地を第5図中に示した。

(湯川)



第5図 周辺の遺跡・史跡の分布 (○仲田遺跡)

(別表)

No.	遺跡名	種別	時期	所在地
	仲田遺跡	水田	中世・近世	野牛島761他
1	大塚遺跡	集落	縄文・古墳・奈良・平安	野牛島3173-1他
2	石橋北屋敷遺跡	集落	縄文・古墳～中世	野牛島2744他
3	立石下遺跡	集落	縄文～中世	野牛島2580他
14	赤山遺跡	散布地	縄文	野牛島2821他
18	六科・堀向(Ⅰ)遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	六科753他
19	六科・堀向(Ⅱ)遺跡	散布地	中世・近世	六科745-1他
20	六科・北新田遺跡	散布地	平安・中世・近世	六科544他
21	六科・高塚遺跡	古墳?	古墳?	六科925-2他
22	六科・宮西遺跡	散布地	近世	六科1497他
23	六科・村北遺跡	散布地	縄文・中世	六科47-1他
24	六科・御崎遺跡	散布地	中世・近世	六科191他
25	野牛島・立石上(Ⅰ)遺跡	散布地	中世・近世	野牛島2537他
26	野牛島・立石上(Ⅱ)遺跡	散布地	平安・中世	野牛島2483他
27	野牛島・西ノ久保遺跡	散布地	平安	野牛島2995他
28	野牛島・小泉遺跡	散布地	平安	野牛島2813他
29	赤山・仲田遺跡	水田	中世・近世	野牛島788他
30	野牛島・石橋遺跡	散布地	平安	野牛島3031他
31	野牛島・大塚遺跡	集落	奈良・平安	野牛島3047-3他
32	野牛島・舞台遺跡	散布地	平安・中世	野牛島3080他
33	野牛島・立石下遺跡	散布地	平安・中世	野牛島2594-1他
34	野牛島・西ノ神(Ⅰ)遺跡	散布地	中世・近世	野牛島2656-1他
35	野牛島・西ノ神(Ⅱ)遺跡	古墳?	古墳?	野牛島2616
36	野牛島・居村遺跡	散布地	近世	野牛島2114他
37	野牛島・家西遺跡	散布地	中世・近世	野牛島2148他
38	野牛島・下ノ川(Ⅰ)遺跡	散布地		野牛島96他
39	野牛島・下ノ川(Ⅱ)遺跡	散布地		野牛島132他
40	上高砂・村中遺跡	散布地	近世	上高砂982他
41	櫻原・天神遺跡	集落	古墳・平安	櫻原800他
42	櫻原・天神(Ⅰ)遺跡	散布地	平安	櫻原555他
43	櫻原・天神(Ⅱ)遺跡	散布地	平安・中世	櫻原856-1他
44	櫻原・南原遺跡	散布地	平安・中世	櫻原505他
45	長谷寺遺跡	散布地	平安・中世・近世	櫻原440-1他
46	櫻原・石丸(Ⅰ)遺跡	散布地	中世・近世	櫻原586
47	櫻原・石丸(Ⅱ)遺跡	散布地	平安・中世・近世	櫻原595
48	櫻原・石丸(Ⅲ)遺跡	散布地	中世・近世	櫻原660他
49	舞台遺跡	集落	平安	德永1921他
50	坂ノ上姥神遺跡	散布地	平安	德永1845他
51	徳永・村上遺跡	散布地	平安	徳永1976他
52	長盛院遺跡	散布地	中世・近世	徳永1678他
53	徳永・御崎遺跡	散布地	縄文・平安	徳永1666他

#### (参考資料)

- ・『八田村誌』 1972
- ・『韮崎市誌』 1978
- ・土地分類基本調査『韮崎・市野瀬』 山梨県企業局 1986
- ・土地分類基本調査『大河原・鰐沢』 山梨県農務部 1993
- ・山梨県歴史の道調査報告書第15集『市川道』 山梨県教育委員会 1988
- ・山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第137集『大塚遺跡』 1997
- ・山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第152集『山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書』 1998
- ・山梨県埋蔵文化財センター年報15号・16号 1999・2000
- ・『村内遺跡詳細分布調査報告書』 八田村教育委員会 2000

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 造構

#### 1区

本区では、3枚の水田面と4本の畦・石列を伴う道および旧河道が発見された。

それぞれの水田面は、南北方向に延びる3本の畦によって区画される。また、東西方向に途切れ途切れではあるが、1本の畦状の高まりが確認される。最東端の南北方向の畦は、南の端で緩やかに曲線を描き、東西方向の畦状の高まりに交差する。この交差する箇所には、水口が設置される。水口にはやや大型の礫が存在し、この礫はもともとこの水田に設置されていたものと思われ、この施設に伴うものと考えられる。この礫の設置として考えられる用途は、ゴミなどをこの礫で止める役目をしていたものであろう。

畦の高さは、本水田面から畦の頂までとし、16~21cmを計測する。東側水田からの遺物は、13点である。

中央に設置された畦は、2箇所切られている。この畦の南の端では、東西方向に延びる畦状の高まりと交差する箇所に水口が施設されている。やはりこの水口の箇所には、やや大型の礫が存在しており、この水口の施設に伴う礫と考えられる。

中央につくられた水田の幅は、最大箇所で7.50mを計測する。また第8図の中央の水田跡の北東隅の白丸は、こぶりの足跡である。畦の高さは、本水田面から畦の頂までとし、20cm前後を計測する。遺物は、8点出土した。

1区の西側に存在する南北方向の畦は、部分的に確認された。この畦は、礫を伴う道によって削られている(第8、14図)。水田面に広がっているのは、足跡である。足跡の方向は一定ではなく、方向性は見受けられない。本水田から出土した遺物は、わずか5点である。

東西方向に延びる畦状の高まりを挟んだ南の面では、水田跡で確認されたような床面が認められなかったことにより、この面には水田が存在していなかったことが明らかにされた。この面の調査は、当初水田面の上層に堆積する砂層がこの南の面にも存在しており、この砂層を排除することによって床面が検出されるものと考えられたが、この面は実質上他の床面より高かったこと、そして土地の傾斜からも他の床面より低い位置で確認されることが予想されるため掘り下げを行ったが、水田面は確認されず東西方向の南側の畦状の高まりの際では、砂の堆積が認められ、南の固い面が掘りくぼまれていた。これは、洪水によって削られたものとも考えられ、このため東西方向の畦は結果的に畦状に残ったものなのか、それとも畦の間に若干の浅く細い溝が存在していたのかは不明である。しかし、この畦の東端では、畦が確認されないことからすれば、本来畦は存在せず、溝もまた存在していないことが想像される。このことから、北側に存在する水田跡との境には畦の施設ではなく、3区の西側のような段差によって区画されていたものと考えられる。

### 石列を伴う道について

本区の西に位置し、ほぼ南北方向に構築されている。この東側の石列は、西側の石列に比較して大型の砾で構築されるが、北端では遺構確認のために重機による掘削によって、大型の砾の幾つかは抜き取ってしまったことにより図面には記載されない。掘削当初、河川の氾濫による砾と考えていたことから、北端に存在する砾を抜き取ってしまい、掘削途中からこの大型の砾が一定方向に広がりを持っていることが明らかにされ、そのまま残して掘削を行った。また道の西隣りでは、水田跡は確認されない。

石列の間には、小砂利が詰められており、突き固められたためか非常に固い。第14図より土層の堆積状況は、人為的な堆積を示しており、畦を壊して構築されている。石列の幅は、約1.80mを計測する。時代としては本遺跡と異なるが、「宮沢中村遺跡」(註1)では、江戸時代後期の参道が確認されている。

旧河道は、石列を伴う道と水田跡を壊しながら蛇行し、南東方向へ流れる。第14図・写真図版1の旧河道の土層堆積状況は、砂利層が下層に認められ、ほとんどの層は砂を含む堆積を示す。水田面が確認されない箇所での土層堆積は、どの層もほぼ水平な堆積を示す。また旧河道内全てを掘りきることができなかつたため、壁際のみ掘り下げを行った。そのため図面上では溝のようになっているが、調査区域内では河道の幅が確認されておらず、現存する河道の幅は9mである。

(註1) 山梨県教育委員会「宮沢中村遺跡」2000 山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公团東京第二建設局 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第181集

p23「幅は2m程であることから本来は1間の道であったとみられ……。参道の地表面は堅く踏みしめられている。……側石で区画された……長さ12mの砂利敷きの参道……側石は長さ10cmから50cmの河原石が用いられている……この側石の高さまで土が盛られ踏み固められていた。」

時代的に異なるものの、道の両脇には石が設置され、石で区画されたその中には砂利が敷かれていたことを考えれば、本遺跡の石列を伴う道は「参道」としての性格が強いものと考えられる。

また、第5図(5)に示してあるように、本遺跡のすぐ南脇には『旧諏訪神社跡の碑』が建てられており、史実かどうかは不明であるが、参道としての性格を有するものであれば『旧諏訪神社』は、碑が建てられていたこの場所付近にあったことが想像される。

## 2区

本区では、4枚の水田面と3本の畦および旧河道が確認された。

1区側の1番目の水田跡は、旧河道によって大きく壊される。水田面には、溝状の足跡が東西方向に8条で、それぞれの間隔は広い箇所で2.2m、狭い箇所で1.4mを計測する。そしてこの足跡に直行する方向に足跡が7条認められ、それぞれの間隔は1.0m~1.50mを計測する。この溝状となる足跡は、1区では確認されなかった足跡の形状である。また溝状の中の足跡の列であるが、足跡は溝に交差するように2列になっており、そのため一つ一つ足跡を図化することができなかつたため、溝状のように図示(第10図)したものである。1本の溝状になつてゐる足跡が2列となつた理由としては、東西方向の溝状の向きについては溝内の南側と北側の2列に認められ、南側の足跡については南に向いて稲刈りが行われ、北側の足跡については北に向いて稲刈りが行われたものと思われる(写真図版2・3)。稲刈りも手前から2~3株くらいを刈り取り、そのまま左右どちらかへ横歩きしながら刈り取りが行われ、そして稲の刈り取り後、同じ列で向きを変え方向転換をして、再び刈り取りが行われたことによってできた足跡と考えられる。

また南北方向のものについては、畦の形状が弓なりを呈しており、調査区外においては更に曲線を描くものと思われ、畦に直行する形で足跡の列が形成されたためと考えられる。

本水田につくられた畦の長さは18mを計測し、畦は2ヶ所壊される。また畦の頂から水田面までの高さは約30cmを計測する。本水田から出土した遺物は、17点である。

東側から2番目の水田について、1番目の水田面と同様溝状の足跡が検出され、曲線を描く畦に直行する形で確

認される。本水田の西には直線的に畦がつくれられ、この畦は2箇所壊されている。水田の規模は、最大幅で14mを計測する。また畦の頂から水田面までの高さは、約30cmを計測する。本水田から出土した遺物は、40点である。

3番目の水田については、本区で確認された1・2番目の水田面と同様の足跡が確認される。本水田は、ほぼ南北の直線的に延びる両畦によって区画される。水田の幅は8mで、1区の2番目の水田とほぼ同じような幅をもつ。また畦の頂から水田面までの高さは、約20cmを計測する。本水田から出土した遺物は、6点である。

4番目の水田については、幅が狭いためか遺物は確認されない。

各水田面に残存する足跡の列は、本区ではどの水田面にも認められるとともに、同一方向（おおよそ東西方向）で確認される。特に弓なり状を呈する畦で、1番東の水田面だけは方向を異にする足跡の列が認められる。2番目の水田も、弓なり状を呈する畦に直行する方向で足跡の列がつくられている関係上、調査区外においては1番目の水田と同様直交する足跡の列が存在するものと思われる。

### 3区

本区では、3枚の水田面と4本の畦および1区まで連続する旧河道が確認された。

東側の水田は、畦と畦に挟まれた細長い水田跡である。畦による区画が確認されておらず、現存する水田の長さは27m、畦から畦までの幅は9mを計測する。水田面に残された足跡の列は、北西から南東に延びる畦に並行している。これらの足跡の列は、2区で確認された足跡の列と同様な形状をなす。

本水田の西につくられた畦の際には、一列の足跡が残され（写真図版3）、南北方向の横歩きで東向きに稲刈りがなされたものと考えられる。第12図では、足跡の列が途切れ途切れで3本図示されているが、写真図版3では足跡の列が5本明瞭に残されている。それぞれの間隔は、0.5m～0.9mを計測する。足跡の列が抜けている箇所の幅は、4.0m～4.5mであるが、この間に足跡の列が2本追加される。

西の畦の頂から水田面までの高さは30cmで、東の畦の高さは10cmである。それぞれの畦は、数箇所壊される。本水田から出土した遺物は、60点である。

本区の中央に存在する水田は、本遺跡では最大の規模を有するものと思われる。幅は16mで、現存する長さは29mを計測し、長方形を呈するものである。この水田の中には、畦がつくれられた形跡はない。また水田面の中に溝が数条認められるが、足跡の列ではない。本水田の西側には約35cmの段差があり、畦は形成されない。この段差のほぼ中央脇の水田面には、洪水によって削られた落ち込みが存在する。この落ち込みの底には礫が露出し、これは床面の下層に堆積する礫層である。また水田面に存在する礫は、洪水の際流れ込んできた礫と思われる。北隅の一画は、一部更に10cm掘り下げた面である。本水田から出土した遺物は、59点である。

北西に存在する水田は、高さ28cmの畦によって区画され、西の礫によってつくられた構築物（第12.15図）は、本水田に伴うものである。この礫の構築物は、段差のある壁面につくられたもので、壁面と水田面の境に置かれた礫は、写真図版4のように、床面を掘り込んで縦に据え置かれている。そして、その上に土盛りを行い突き固めたもので、その際古銭H K44（天祐通宝）が混入したものの古銭が出土した。このような構築物は、本遺跡ではこの地点しか確認されない。本水田から出土した遺物は、狭いながらも22点が見つかっている。

礫による構築物および段差によって水田と区画しているこの構造物は、大きな段差による壁面保護のために礫で構築されたものと考えられる。

本区の西側では、1区の南側と同様に床面は確認されず、水田は形成されなかったものと思われる。このことは、段を有する場所に畦および足跡の存在が認められないことによるものである。また最西端では、一部畦状の盛り上がりが確認され、再び水田が形成されている可能性がある。本水田およびこの周辺から出土した遺物は、49点である。

## 第2節 出土遺物

### (1区出土遺物 第6図)

D K15・17・21・27・46・51・56・62・65・66・67・69・172・173、表掲1は、1区からの出土である。15の推定口径は7.6cm、現存高は1.8cmを計測する。27の推定口径は9.0cm、現存高は2.2cmを計測する。51の推定口径は13.5cm、現存高は1.9cmを計測する。65の推定口径は9.4cm、現存高は1.2cmである。172の推定口径は11.2cm、現存高は1.9cmである。

D K17・21・69・173は底部の破片で、糸切り痕が認められる。17の推定の底径は5.6cm、21の底部の推定径は7.5cmである。69の推定の底径は、5.0cmである。D K19は、焼きの悪い須恵質土器である。推定の底径は、8cmである。また底部には、糸切り痕が明瞭に認められる。

D K50は、天目茶碗の口縁部である。

T K7は灰釉陶器で、蓋と思われる。上面には浅い窪みが認められ、下面には糸切り痕が明瞭に残されている。最大径は4.5cm、器高は1.2cmである（この陶器が石列を伴う道と関係があるものと考えられる。道の東側で水田ではない箇所からの出土）。

### (2区出土遺物 第6・7図)

D K91・93・102・81・112・123・129・235・78・72・88・108・109・110-2・111・113・106・110・117・119・124・128・236は、土師質土器である。

D K91は、底部を一部欠損するもので口径10.6cm、底径5.4cm、器高2.8cmをそれぞれ計測する。口縁部端はやや先細りし、直下ではやや膨らむ。内面は緩やかな傾斜をもって底部につながる。底部は、厚みを持ち糸切り痕が残る。93は、口径6.8cm、器高2.0cm、底径3.2cmを計測する。口縁部から底部にかけて、ほぼ同じ厚さでつくられる。小型の皿である。102の口径は8.2cm、器高は1.4cm、底部は4.0cmである。81の推定の口径は9.8cm、現存する器高は1.4cmである。112の推定口径は6.9cm、残存する器高は2.0cmである。123の推定口径は8.3cm、残存する器高は1.1cmである。129の推定口径は12.0cm、現存する器高は2.1cmである。235の推定口径は13.8cm、現存する器高は1.8cmである。106の底径は6.0cm、110の底径は5.8cm、117の底径は5.8cmである。119の底径は8.4cm、124の底径は5.0cm、128の底径は6.0cm、236の底径は7.0cmである。

D K75は、ほうろくである。推定の底径は28cmを計測する。D K34・243は、すり鉢である。34の底径は11.0cm、残存する器高は4.5cmである。特に243は、7本を単位とした溝が施される。D K40は、柱状高台の一部である。底部には、糸切り痕が残される。

T K5・12・13は、灰釉陶器である。5の推定口径は9.0cm、残存する器高は4.0cmである。12の推定口径は15.6cmで口唇部は膨らむ。13の推定口径は17.6cmを計測する。T K6は、瓶子の肩の部分の破片と思われる。

T K15は青磁蓋の破片である。推定の口径は10.8cm、現存する器高は2.0cmをそれぞれ計測する。色調はやや緑がかった青を呈する。口唇部は緩やかに外反する。T K16は、灰釉陶器のおろし皿の破片である。本遺跡からは、この一点だけ確認される。内面には幾筋もの沈線が施され、半截竹管状工具により沈線間を埋める。

### (3区出土遺物 第7図)

D K194・204・214は、土師質土器の口縁部の破片である。194の推定口径は11.6cm、現存する器高は1.3cmである。204の推定口径は15.0cm、残存する器高は2.1cmである。214の推定口径は9.0cm、現存する器高は1.6cmを計測する。

D K254は、須恵質土器の口縁部破片である。推定の口径は15.0cm、現存する器高は3.0cmである。D K142は土師質土器で、推定の口径は8.2cm、残存する器高は2.3cmである。口唇部は直立し、以下底部に向かって湾曲する。外面には横位に連続する円形の押型文が施される。

D K233・250は、土師質土器である。233の推定される底径は4.6cm、残存する器高は0.9cmである。底部には、糸切り痕が残存する。250の推定される底径は6.0cm、残存する器高は0.7cmである。

T K17は、天目茶碗の口縁部である。推定される口径は11.4cm、現存する器高は2.4cmである。口唇部は指でつ

なんだように薄くつくられる。17-2は須恵質土器の底部である。推定される底径は7.0cm、現存する器高は1.1cmである。底部には、糸切り痕が残される。

D K258は、常滑の壺の頭部の破片である。

表探4は、土師質土器の蓋である。3区の調査区の東側で、床面の上層に堆積していた砂層からの出土である。推定される口径は15.6cm、残存する器高は1.3cmをそれぞれ計測する。内面の口唇部には、浅い窪みが巡らされる。

T K25は、陶器の壺の口縁部の破片である。口唇部は内側に折り曲げてつくられている。

T K18は小型の青磁である。外面には斜めに筋がつけられており、内面の上方には蓋を受ける突起が施される。推定される底径は4.0cm、現存する器高は1.3cmである。19は陶器で、推定される口径は13.8cm、現存する器高は2.2cmを計測する。また外面の口縁部付近には、沈線による文様が施される。

1区 T K8は、陶器の染め付けの口縁部の破片である。推定される口径は8.8cm、現存する器高は1.8cmである。2区 T K19は、陶器の口縁部の破片である。推定される口径は12.0cmで、現存する器高は2.6cmである。表探5は、口縁部から底部まで残存する磁器である。不定形な形状を呈するため、口径は不明である。また残存する器高は2.3cmである。

表探6は、口縁部から胴部まで現存する青磁片である。推定される口径は8.2cm、現存する器高は2.8cmを計測する。胴部から内側へ湾曲して、頭部では直立する。口唇部は外側へ張り出される。

表探7は、染め付けの碗で、現地表面の畑での表探品である。推定される口径は9.7cm、器高は5.0cm、底径は4.0cm、高台高は0.5cm、見込みの深さは3.3cmである。表探8も同様、染め付けの筒型碗である。外面には菊花文が描かれる。

表探9は、石板である。粘板岩で、縱横に筋が引かれる。

2区 H K4は、刀子と考えられる。旧河道からの出土で、鋒が著しい。現存する最大長は15.2cm、最大幅は1.5cm、最大厚は0.7cmをそれぞれ計測する。保存処理後の重さは、19.93gである。

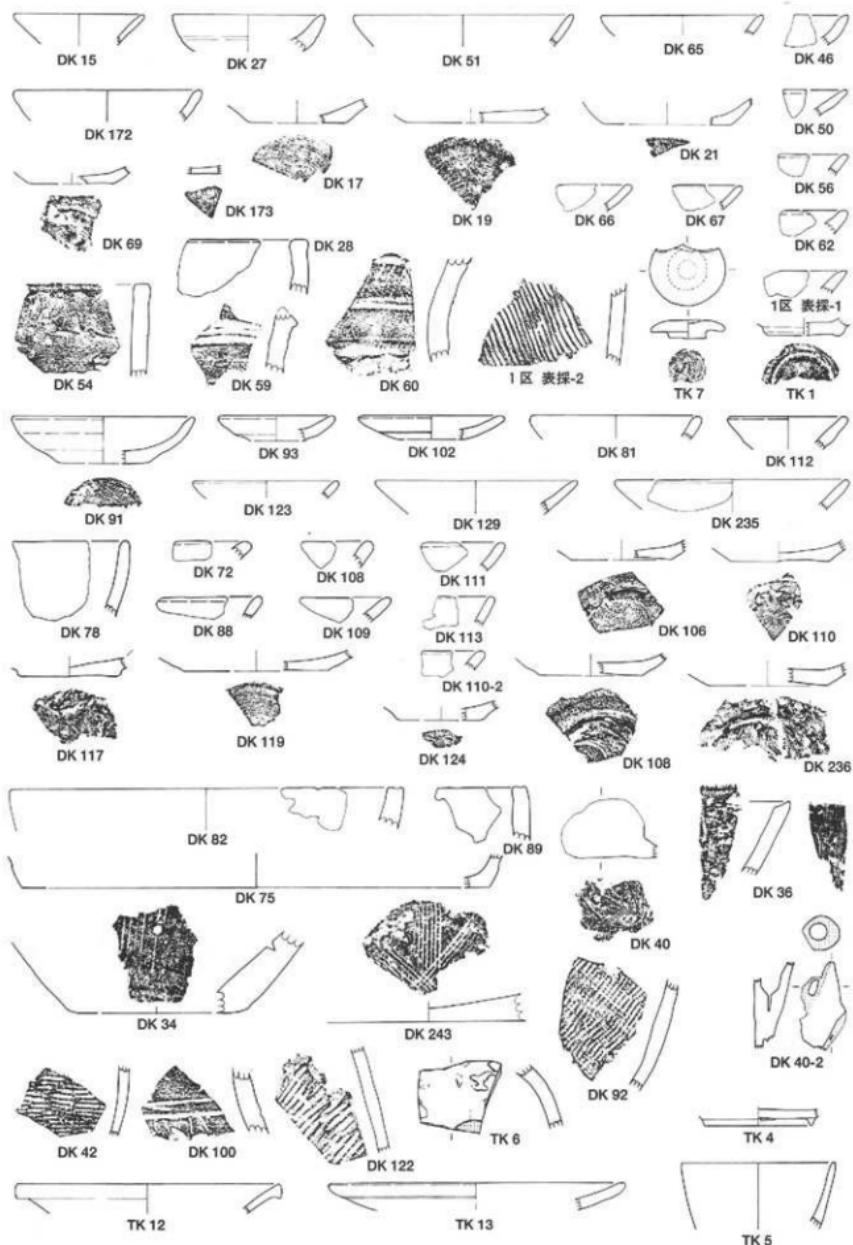
3区 H K49・55は、釘と思われる鉄製品である。49の最大長は3.7cm、最大幅は0.7cm、最大厚は0.5cmをそれぞれ計測する。重量は、保存処理後で3.45gである。55の最大長は4.4cm、最大幅は0.9cm、最大厚は0.6cmを計測する。重量は、保存処理後で6.28gである。

3区 H K46は、用途不明の鉄製品である。最大長は12.4cm、最大幅は2.0cm、最大厚0.1cmを計測する。重量は、保存処理後で13.26gである。

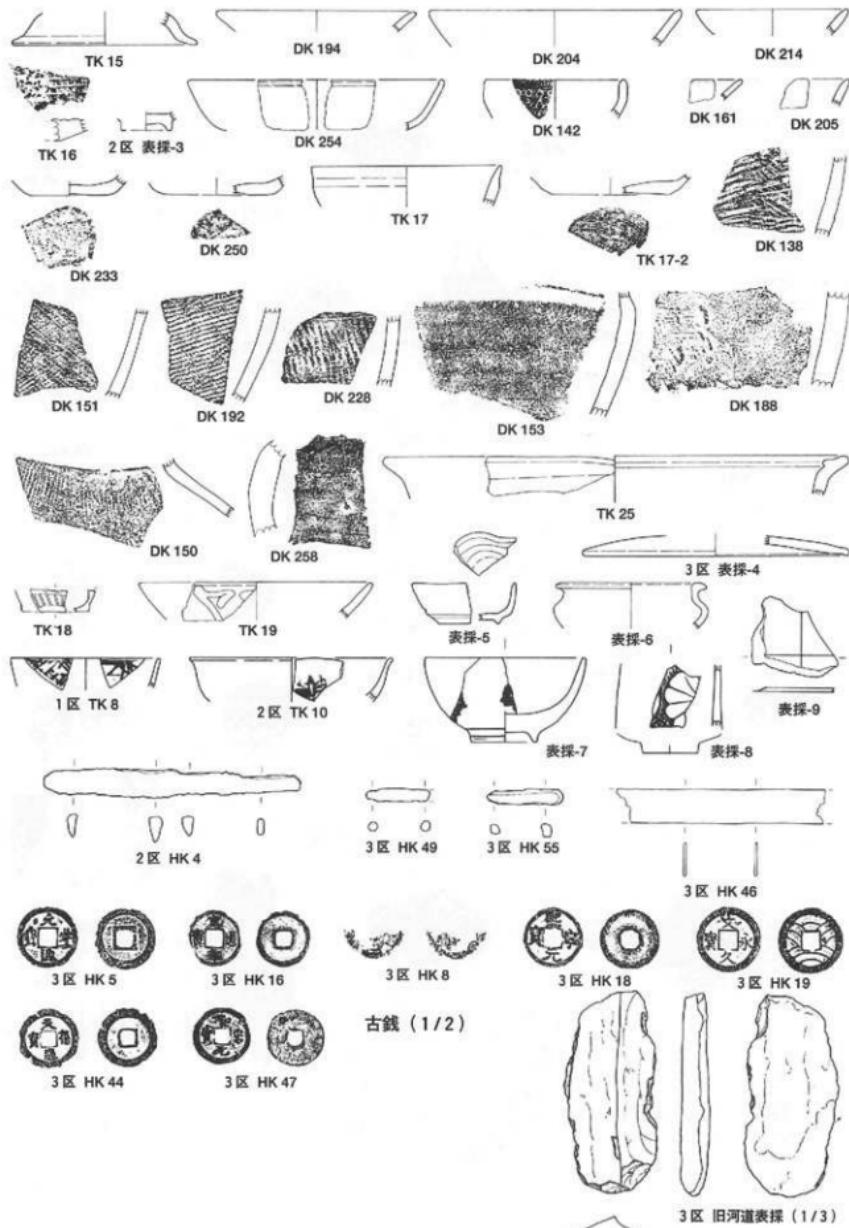
古錢の出土は、破損品を含めて合計7枚である。2区からの出土は、H K 5・16・8の3点である。5は2区の旧河道からの出土で、径2.45cm、厚さ0.1cm、重さ2.84gである（元豊通宝）。16は2区の旧河道のすぐ脇から発見されたもので、床面の直上に近い砂層から出土した。径2.24cm、厚さ0.12cm、重さ2.25gである（寛永通宝）。8は2区の旧河道からの出土で、現存する径は2.52cm、厚さ0.1cm、重さ0.55gである。破損しているため、文字の判読はできない。

3区からの出土は、H K18・19・44・47の4点である。18は床面より15cm上層で出土する。径2.33cm、厚さ0.09cm、重さ2.45gである（熙寧元宝）。19は3区の水田面より21cm上の砂層から出土したものである。径2.63cm、厚さ0.1cm、重さ2.80gである（文久永宝）。44は3区の北西側の礫の構造物の7cm上からの出土である。径2.43cm、厚さ0.15cm、重さ3.06gである（天祐通宝）。47は3区の西からの出土である。この面は、水田耕作が行われていなかった面である。径2.31cm、厚さ0.11cm、重さ1.42gである（聖宋元宝）。

（山本）



第6図 1区・2区出土遺物実測図および拓本 (1/3)



第7図 2区・3区表出土遺物実測図および拓本 (1/3)

## 仲田遺跡 出土遺物位置・標高・種別・観察表

(No.1)

区	遺物	番号	標 高	種 別	備 考
1	DK	1	319.881	土師質土器	橙色、金雲母、石英
1	DK	2	319.811	土師質土器	にぶい黄褐色、石英、角閃石
1	DK	3	319.866	土師質土器	灰黄色、石英、赤色粒子
1	DK	4	319.897	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、底部糸切り
1	DK	5	319.977	土師質土器	明赤褐色
1	DK	6	319.838	土師質土器	にぶい橙色、長石、赤色粒子
1	DK	7	319.870	土師質土器	にぶい橙色、金雲母、長石、赤色粒子
1	DK	8	320.074	土師質土器	明赤褐色、金雲母、長石、赤色粒子、底部糸切り
1	DK	9	319.934	土師質土器	明赤褐色、珪石
1	DK	10	319.822	土師質土器	にぶい橙色、長石
1	DK	11	320.112	土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母、石英、角閃石
1	DK	12	320.073	土師質土器	褐色、金雲母、石英
1	DK	13	319.948	土師質土器	にぶい赤褐色、金雲母、石英
1	DK	14	319.989	土師質土器	にぶい黄褐色、石英、珪石
1	DK	15	320.011	土師質土器	明赤褐色、金雲母、赤色粒子、平安時代
1	DK	17	320.013	土師質土器	明赤褐色、金雲母、底部
1	DK	17-2		土師質土器	にぶい橙色、金雲母、赤色粒子
1	DK	18	320.016	土師質土器	褐色、金雲母、石英
1	DK	19	320.001	須恵質土器	灰オリーブ色、金雲母、底部
1	DK	20	320.165	土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母、石英、長石
1	DK	21	320.095	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、底部
1	DK	22	320.159	土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母
1	DK	23	320.096	土師質土器	明赤褐色、長石
1	DK	24	320.157	土師質土器	褐色、石英、角閃石
1	DK	25	320.165	須恵質土器	灰色
1	DK	25-2		土師質土器	にぶい橙色、金雲母、長石
1	DK	26	320.211	土師質土器	にぶい橙色、金雲母
1	DK	27	320.048	土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母、赤色粒子、口縁部
1	DK	28	320.127	土師質土器	にぶい赤褐色、金雲母、石英、ハウロクの口縁部か
1	DK	28-2		土師質土器	褐色、金雲母
1	DK	29	320.079	土師質土器	灰褐色、金雲母、長石
1	DK	30	319.979	土師質土器	にぶい赤褐色、金雲母、石英、底部
1	DK	30-2		陶器	灰黄色
1	DK	31	320.118	土師質土器	褐色、長石
2	DK	32	320.584	土師質土器	にぶい橙色、金雲母
2	DK	33	320.555	土師質土器	にぶい橙色、珪石
2	DK	34	320.563	土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母、石英、底部
2	DK	35	320.573	土師質土器	明赤褐色、金雲母、赤色粒子、底部
2	DK	35-2		土師質土器	褐色、金雲母
2	DK	36	320.600	土師質土器	橙色、金雲母、すり鉢の口縁部
2	DK	36-2		土師質土器	明赤褐色、金雲母、赤色粒子、口縁部
2	DK	37	320.566	土師質土器	にぶい褐色、金雲母、珪石
2	DK	38	320.676	土師質土器	明赤褐色、金雲母、石英
2	DK	39	320.664	陶質土器	褐色、金雲母、赤色粒子
2	DK	40	320.844	土師質土器	褐色、金雲母、柱状高台、底部に糸切り、平安時代
2	DK	40-2		土師質土器	にぶい褐色、金雲母、赤色粒子
2	DK	41	320.842	土師質土器	にぶい褐色、金雲母、石英
2	DK	42	320.978	須恵質土器	灰色、壺の胴部
2	DK	43	320.844	土師質土器	褐色、金雲母
1	DK	45	319.897	土師質土器	にぶい橙色、金雲母、赤色粒子
1	DK	46	319.961	土師質土器	浅黄褐色、金雲母、口縁部
1	DK	47	320.102	土師質土器	にぶい橙色、長石、底部
1	DK	48	320.161	土師質土器	褐色、石英
1	DK	49	320.104	土師質土器	褐色、金雲母、石英
1	DK	50	320.102	天目茶碗	胎土は白色、鉄輪、口縁部
1	DK	50-2		土師質土器	橙色、金雲母
1	DK	51	320.098	土師質土器	にぶい褐色、金雲母、赤色粒子、口縁部
1	DK	52	319.902	土師質土器	明褐色、金雲母
1	DK	53	320.000	土師質土器	褐色、金雲母

## 仲田遺跡 出土遺物位置・標高・種別・観察表

(No.2)

区	遺物	番号	標 高	種 別	備 考
1	DK	54	319.925	土師質土器	明赤褐色、金雲母、口縁部
1	DK	56	319.794	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、口縁部
1	DK	57	320.056	ぼうろく	にぶい・橙色、金雲母、底部
1	DK	58	319.769	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子
1	DK	59	320.081	須恵質土器	灰色、口縁部
1	DK	60	319.722	陶器	オリーブ褐色
1	DK	61	319.648	須恵質土器	灰色、長石
1	DK	62	319.898	土師質土器	橙色、金雲母、口縁部
1	DK	63	319.748	須恵質土器	灰白色
1	DK	63-2		陶器	灰黄色
1	DK	64	319.758	土師質土器	にぶい・橙色、金雲母
1	DK	65	319.824	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、口縁部
1	DK	65-2		ぼうろく	にぶい・橙色、金雲母、把手部
1	DK	66	319.816	土師質土器	にぶい・橙色、金雲母、口縁部
1	DK	67	319.744	土師質土器	明赤褐色、金雲母、赤色粒子、口縁部、平安時代
1	DK	68	319.963	土師質土器	橙色、金雲母、黄石
1	DK	69	319.934	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、底部
1	DK	70	319.805	土師質土器	明赤褐色、長石、口縁部
1	DK	71	319.709	土師質土器	にぶい・黃褐色、金雲母
2	DK	72	320.643	土師質土器	にぶい・橙色、金雲母、口縁部
2	DK	72-2		土師質土器	橙色、金雲母
2	DK	73	320.759	土師質土器	灰褐色、金雲母
2	DK	73	320.763	土師質土器	にぶい・橙色、金雲母
2	DK	74	320.763	土師質土器	にぶい・赤褐色
2	DK	75	320.741	ぼうろく	にぶい・褐色、金雲母、底部
2	DK	75-2		土師質土器	にぶい・褐色、金雲母、赤色粒子
2	DK	76	320.643	土師質土器	明赤褐色、金雲母
2	DK	77	320.649	土師質土器	灰褐色、金雲母
2	DK	78	320.619	土師質土器	灰褐色、金雲母、口縁部
2	DK	79	320.548	土師質土器	暗褐色、珪石
2	DK	80	320.503	土師質土器	橙色、珪石
2	DK	81	320.667	土師質土器	にぶい・赤褐色、金雲母、口縁部
2	DK	82	320.628	土師質土器	にぶい・橙色、金雲母、赤色粒子、口縁部・口縁部
2	DK	82-2		土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子
2	DK	84	320.610	土師質土器	明褐色、金雲母
2	DK	85	320.657	土師質土器	にぶい・橙色、金雲母
2	DK	85-2		土師質土器	にぶい・褐色、金雲母
2	DK	85-3		土師質土器	橙色
2	DK	86	320.675	土師質土器	にぶい・黃褐色、金雲母
2	DK	87	320.465	土師質土器	橙色、赤色粒子
2	DK	88	320.508	土師質土器	灰黄褐色、金雲母、口縁部
2	DK	89	320.633	土師質土器	にぶい・褐色、金雲母、口縁部
2	DK	90	320.639	土師質土器	にぶい・橙色、金雲母、胴部から底部
2	DK	91	320.513	土師質土器	橙色、金雲母、口縁部から底部、底部は米切り、16C後半
2	DK	92	320.457	須恵質土器	灰色、壺の胴部
2	DK	93	320.536	土師質土器	橙色、金雲母、白色赤色粒子、口縁部
2	DK	94	320.533	土師質土器	にぶい・褐色、金雲母、赤色粒子、口縁部
2	DK	94-2		土師質土器	にぶい・褐色、金雲母、赤色粒子、底部
2	DK	95	320.484	土師質土器	明赤褐色、金雲母
2	DK	96	320.482	土師質土器	にぶい・褐色、金雲母、ホウロクの一端か
2	DK	97	320.528	土師質土器	明褐色
2	DK	98	320.507	土師質土器	にぶい・黃褐色、金雲母
2	DK	99	320.606	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子
2	DK	100	320.611	須恵質土器	灰白色
2	DK	101	320.617	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、口縁部
2	DK	102	320.538	土師質土器	灰黄褐色、金雲母、赤色粒子、口縁部から底部
2	DK	103	320.401	土師質土器	にぶい・褐色、珪石
2	DK	103-2		土師質土器	明褐色、金雲母、赤色粒子
2	DK	104	320.364	土師質土器	にぶい・赤褐色、石英、

## 仲田遺跡 出土遺物位置・標高・種別・観察表

(No.3)

区	遺物	番号	標 高	種 別	備 考
2	D K	105	320.774	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子
2	D K	106	320.722	土師質土器	にぶい褐色、金雲母、底部は糸切り
2	D K	107	321.963	土師質土器	明赤褐色、金雲母、赤色粒子
2	D K	108	321.898	土師質土器	明赤褐色、金雲母、赤色粒子、口縁部
2	D K	109	321.835	土師質土器	浅黄橙色、金雲母、口縁部
2	D K	110	321.828	土師質土器	にぶい褐色、金雲母、底部は糸切り
2	D K	110-2		土師質土器	明赤褐色、金雲母、赤色粒子、口縁部
2	D K	111	321.965	土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母、口縁部
2	D K	112	321.924	土師質土器	にぶい褐色、金雲母、口縁部
2	D K	113	320.402	土師質土器	明赤褐色、金雲母、口縫部
2	D K	114	320.412	土師質土器	明赤褐色、石英
2	D K	115	320.539	土師質土器	赤褐色、金雲母
2	D K	116	320.279	須恵質土器	浅黄色
2	D K	117	320.505	土師質土器	橙色、金雲母、底部はヘラ切りか
2	D K	118	320.489	土師質土器	にぶい褐色、石英
2	D K	119	320.522	土師質土器	橙色、金雲母、底部糸切り
2	D K	119-2		土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、口縫部
2	D K	120	320.567	土師質土器	にぶい褐色、金雲母、赤色粒子
2	D K	121	320.589	土師質土器	橙色、金雲母
2	D K	122	320.610	須恵質土器	灰白色、金雲母、珪石
2	D K	123	320.361	土師質土器	にぶい褐色、金雲母、口縫部
2	D K	123-2		土師質土器	橙色、金雲母
2	D K	124	321.015	土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母、底部糸切り
2	D K	125	321.015	土師質土器	にぶい褐色、金雲母
2	D K	126	320.648	土師質土器	にぶい褐色、金雲母
2	D K	127	320.380	土師質土器	にぶい褐色、赤色粒子、口縫部
2	D K	128	320.459	土師質土器	橙色、金雲母、底部糸切り
2	D K	129	320.664	土師質土器	にぶい褐色、金雲母、口縫部
2	D K	130	320.587	土師質土器	明赤褐色、石英、底部付近
2	D K	130-2		土師質土器	にぶい褐色
3	D K	131	321.133	土師質土器	褐色
3	D K	132	321.136	土師質土器	にぶい黄褐色
3	D K	133	321.152	土師質土器	橙色、金雲母、口縫部
3	D K	134	321.129	土師質土器	にぶい褐色、石英
3	D K	135	321.089	土師質土器	黒褐色、石英
3	D K	136	321.158	土師質土器	にぶい褐色、石英
3	D K	137	320.976	土師質土器	赤褐色、金雲母、底部
3	D K	138	320.949	須恵質土器	灰色、たたき目が他の須恵とは違う
3	D K	139	320.937	須恵質土器	灰褐色
3	D K	140	320.943	須恵質土器	灰黄色、金雲母
3	D K	141	320.948	須恵質土器	明褐色、金雲母、石英
3	D K	142	321.109	土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母、口縫に円形の押型文あり
3	D K	143	321.302	土師質土器	褐色、金雲母、石英
3	D K	145	321.041	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子
3	D K	146	321.221	土師質土器	浅黄褐色、赤色粒子
3	D K	147	321.039	土師質土器	にぶい黄褐色、赤色粒子
3	D K	148	321.050	土師質土器	にぶい褐色、金雲母、赤色粒子、カワラケ
3	D K	148-2		土師質土器	黄褐色、赤色粒子
3	D K	149	321.170	土師質土器	灰褐色、石英
3	D K	150	321.230	須恵質土器	黄褐色、頭部～胴部 突起
3	D K	151	321.252	須恵質土器	灰オーリーブ色
3	D K	152	321.274	須恵質土器	にぶい褐色、
3	D K	153	321.403	陶質土器	灰黃褐色、
3	D K	154	321.264	土師質土器	褐色、赤色粒子
3	D K	155	321.276	須恵質土器	黄灰色、
3	D K	156	321.289	土師質土器	赤褐色、金雲母
3	D K	156-2		土師質土器	にぶい黄褐色
3	D K	157	321.276	土師質土器	橙色、赤色粒子
3	D K	158	321.283	土師質土器	にぶい褐色

## 仲田遺跡 出土遺物位置・標高・種別・観察表

(No.4)

区	遺物	番号	標高	種別	備考
3	DK	159	321.309	土師質土器	明赤褐色、石英
3	DK	161	321.279	土師質土器	明赤褐色、口縁部
3	DK	161-2		土師質土器	赤褐色、金雲母、石英
3	DK	162	321.480	土師質土器	赤褐色、石英
3	DK	163	321.502	土師質土器	橙色、金雲母、石英
3	DK	164	321.398	土師質土器	にぶい黄褐色、石英
3	DK	165	321.493	土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母、石英
3	DK	166	321.347	土師質土器	褐色、石英、底部
3	DK	167	321.383	石	
3	DK	168	321.321	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子
3	DK	168-2		土師質土器	橙色、石英、底部
1	DK	169	319.361	土師質土器	にぶい黄褐色、石英
1	DK	169-2		土師質土器	明赤褐色、金雲母、石英
1	DK	170	319.283	土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母、石英
1	DK	170-2		土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子
1	DK	171	319.259	土師質土器	褐色、黃石
1	DK	171-2		土師質土器	明赤褐色、珪石
1	DK	172	320.037	土師質土器	浅黄褐色、金雲母、口縁部
1	DK	173	319.889	土師質土器	にぶい黄褐色、底部余切り
3	DK	174	320.928	土師質土器	橙色、石英
3	DK	175	321.236	土師質土器	明赤褐色、金雲母、赤色粒子
3	DK	176	320.957	土師質土器	明赤褐色、金雲母、石英、口縁部
3	DK	177	320.833	土師質土器	明赤褐色、金雲母
3	DK	178	321.236	土師質土器	にぶい黄褐色、石英
3	DK	179	320.885	土師質土器	にぶい橙色、石英、赤色粒子
3	DK	180	320.900	土師質土器	灰黄褐色、石英、赤色粒子
3	DK	180-2		土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母
3	DK	181	320.944	土師質土器	橙色、石英
3	DK	183	320.942	土師質土器	にぶい褐色
3	DK	184		土師質土器	灰褐色、石英、赤色粒子
3	DK	185	321.185	土師質土器	赤褐色、金雲母、石英
3	DK	186	321.152	土師質土器	明赤褐色、石英、赤色粒子
3	DK	187	321.171	土師質土器	にぶい黄褐色、石英
3	DK	188	321.131	陶器	橙色、石英、珪石、窓 ヘア成形あり
3	DK	189	321.462	土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母、赤色粒子、口縁部
3	DK	189-2		土師質土器	明褐色、金雲母、石英
3	DK	190	321.950	土師質土器	にぶい橙色、金雲母、石英
3	DK	190-2		土師質土器	橙色、金雲母
3	DK	191	321.617	須恵質土器	黄灰色
3	DK	192	321.224	須恵質土器	所々リーピ色、金雲母
3	DK	193	321.716	須恵質土器	灰褐色、金雲母、石英、赤色粒子
3	DK	194	321.802	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、口縁部
3	DK	195	321.634	土師質土器	明赤褐色、金雲母、石英、赤色粒子
3	DK	196	321.583	土師質土器	にぶい橙色、金雲母、石英
3	DK	197	321.589	土師質土器	にぶい橙色、珪石
3	DK	198	321.596	土師質土器	橙色、珪石、底部
3	DK	199	321.596	土師質土器	にぶい橙色、金雲母、赤色粒子、カワラケの口縁部
3	DK	199-2		土師質土器	橙色、石英、赤色粒子
3	DK	200	321.610	土師質土器	橙色、石英、赤色粒子
3	DK	201	321.636	灰釉陶器	淡黄色
3	DK	202	321.334	土師質土器	橙色、石英、赤色粒子
3	DK	203	321.107	土師質土器	橙色、珪石
3	DK	204	321.277	土師質土器	にぶい褐色、金雲母、赤色粒子、口縁部
3	DK	205	321.362	土師質土器	にぶい橙色、金雲母、赤色粒子
3	DK	206	321.586	陶器	にぶい橙色、珪石
3	DK	206-2		土師質土器	にぶい黄褐色、金雲母、石英
3	DK	207	321.670	土師質土器	にぶい黄色、金雲母、石英、口縁部
3	DK	207-2		土師質土器	明赤褐色、金雲母、石英、赤色粒子、208-2と接合
3	DK	208	321.575	土師質土器	明赤褐色、金雲母、石英、口縫部

## 仲田遺跡 出土遺物位置・標高・種別・観察表

(No.5)

区	遺物	番号	標 高	種 別	備 考
3	DK	208-2		土師質土器	207-2と接合する
3	DK	209	321.591	陶器	灰色、石英
3	DK	210	321.578	土師質土器	明赤褐色、石英
3	DK	211	321.607	土師質土器	にぶい、橙色、金雲母、石英、赤色粒子
3	DK	212	321.603	土師質土器	にぶい、橙色、石英
3	DK	213	321.778	土師質土器	橙色、口縁部
3	DK	213-2		土師質土器	にぶい、黄褐色、
3	DK	214	321.597	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、口縁部
3	DK	215	321.617	土師質土器	にぶい、橙色、石英
3	DK	216	321.648	土師質土器	にぶい、橙色、石英
3	DK	217	321.661	土師質土器	にぶい、黄褐色、金雲母
3	DK	217-2		土師質土器	にぶい、黄褐色、金雲母
3	DK	218	321.654	陶質土器	橙色、長石
3	DK	219	321.678	土師質土器	にぶい、橙色、石英
3	DK	220	321.622	土師質土器	橙色、珪石、赤色粒子
3	DK	220-2		土師質土器	明赤褐色、石英
3	DK	221	321.614	灰褐色陶器	淡黄色
3	DK	222	321.610	土師質土器	にぶい、黄褐色、石英、底部か
3	DK	224	321.657	土師質土器	橙色、金雲母、石英、赤色粒子
3	DK	225	321.604	土師質土器	にぶい、黄褐色、珪石
3	DK	226	321.598	土師質土器	橙色、珪石
3	DK	227	321.609	土師質土器	灰黃褐色、金雲母、石英
3	DK	228	321.589	陶質土器	黒褐色、珪石
3	DK	229	321.712	陶質土器	にぶい、褐色、金雲母、長石
3	DK	229-2		土師質土器	橙色、金雲母、石英、赤色粒子
3	DK	230	321.518	土師質土器	赤褐色、金雲母、石英
3	DK	231	321.611	土師質土器	灰黃褐色、石英、底部か
3	DK	232	321.539	土師質土器	橙色、石英
3	DK	233	321.214	土師質土器	にぶい、黄褐色、金雲母、底部糸切り
3	DK	234	321.183	土師質土器	橙色、赤色粒子、底部糸切り
3	DK	234-2		土師質土器	橙色、石英、赤色粒子
2	DK	235	320.522	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、口縁部
2	DK	236	320.604	土師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、底部、平安時代
3	DK	237	321.134	土師質土器	にぶい、褐色、金雲母
3	DK	238	321.151	土師質土器	橙色、金雲母、底部糸切り
3	DK	239	321.069	土師質土器	明赤褐色、金雲母、赤色粒子
3	DK	240	320.837	陶質土器	にぶい、褐色
3	DK	241	320.895	土師質土器	橙色、赤色粒子
3	DK	241-2		土師質土器	にぶい、褐色、赤色粒子
2	DK	242	320.624	土師質土器	黒褐色、石英
2	DK	242-2		土師質土器	明赤褐色、赤色粒子
2	DK	243	320.531	陶器	灰色、石英、底部 すり鉢（8本単位）、15C以降16C代
2	DK	244	321.037	土師質土器	にぶい、橙色、石英、赤色粒子
2	DK	245	320.566	陶器	灰白色
3	DK	246	320.650	土師質土器	にぶい、黄色
3	DK	248	320.885	土師質土器	明赤褐色、石英
3	DK	249	321.069	土師質土器	橙色、石英、赤色粒子
3	DK	250	320.938	土師質土器	明赤褐色、金雲母、底部
3	DK	251	320.903	須恵質土器	黄灰色、石英、口縁部
3	DK	252	321.147	土師質土器	にぶい、褐色、石英、赤色粒子
3	DK	253	321.211	土師質土器	橙色、赤色粒子
3	DK	254	320.989	須恵質土器	灰白色、金雲母、口縁部
3	DK	255	321.247	土師質土器	橙色、金雲母、石英、赤色粒子
3	DK	257	321.080	土師質土器	にぶい、褐色、金雲母、口縫部
3	DK	258	321.133	常滑窯	自然釉、金雲母、頸部
3	DK	259	320.978	陶器	灰黃褐色、石英、變

## 仲田遺跡 出土遺物位置・標高・種別・観察表

(No.6)

区	遺物	番号	標高	種別	備考
1	TK	1	319.790	陶器	淡黄色、底部ろくろ回転、瀬戸・美濃系輪
1	TK	2	320.000	青磁	灰白色
2	TK	4	320.556	灰釉陶器	灰黄色、底部、16C代
2	TK	5	320.609	灰釉陶器	灰白色、表面に線の釉薬が認められる、口縁部、江戸時代
2	TK	6	320.847	灰釉陶器	灰白色、瓶の肩の部分、中世
1	TK	7	320.027	灰釉陶器	灰白色、蓋のつまみ、中世
1	TK	8	319.854	磁器	灰白色、口縁部、江戸後期
2	TK	9	320.810	陶器	灰白色
2	TK	10	320.717	灰釉陶器	灰白色、口縁部、江戸後期
2	TK	10-2		陶器	灰白色
2	TK	11	320.599	陶器	灰白色
2	TK	11-2		磁器	灰白色
2	TK	12	320.748	灰釉陶器	灰白色、口縁部、瀬戸・美濃系
2	TK	12-2		磁器	白色
2	TK	13	320.818	灰釉陶器	灰黄色、口縁部、16C代
2	TK	14	322.035	灰釉陶器	灰黄色、常滑窯
2	TK	15	321.965	青磁	灰白色、蓋
2	TK	16	320.926	灰釉陶器	灰黄色、おろし羅底部付近 釉薬あり、16C代
3	TK	17	321.259	須貝質土器	灰白色、赤色粒子、底部糸切り
3	TK	17-2		天目茶碗	淡黄色、鉄錆、口縁部、16C中頃
3	TK	18	321.141	青磁	灰白色、底部
3	TK	19	321.571	灰釉陶器	灰白色、胴部、TK20と接合
3	TK	20	321.610	青磁	灰白色、口縁部、達弁、中世
3	TK	21	321.196	灰釉陶器	灰白色
3	TK	22	321.058	灰釉陶器	灰白色
2	TK	23	320.570	白磁	TK24と接合、底部付近
2	TK	24	320.676	陶器	TK23と接合
3	TK	25	320.925	陶器	浅黄褐色、蓋、口縁部

## 仲田遺跡 出土遺物位置・標高・種別・観察表

(No.7)

区	遺物	番号	標高	種別	備考
1	HK	1	319.981	骨髄	
2	HK	4	320.596	刀子	
2	HK	5	320.506	天賜通宝	
2	HK	8	320.474	古錢	
2	HK	9	321.483	骨髄	
2	HK	10	321.698	骨髄	
2	HK	12	320.618	スラグ?	
2	HK	13	320.488	骨	
2	HK	14	320.201	骨髄	
2	HK	16	320.536	寛永通宝	
3	HK	18	320.992	無事元宝	
3	HK	19	321.372	文久永宝	
3	HK	20	321.103	骨	
3	HK	21	321.011	骨	
3	HK	24	321.437	骨髄	
3	HK	25	320.941	骨	
3	HK	28	320.869	骨	
3	HK	35	321.152	骨	
3	HK	44	321.575	天賜通宝	
3	HK	46	321.692	鉄製品	
3	HK	47	321.592	聖宗元宝	
3	HK	49	321.129	釘	
3	HK	51	321.147	黒曜石	
3	HK	55	321.441	釘	
3	HK	96	320.846	骨髄	

## 仲田遺跡表採品

(No.8)

区	遺物	番号	標高	種別	備考
	表採			陶器	灰白色、DK245と同じ種類
	表採	表採6		青磁	明緑灰色、口縁部～胴部
3	表採			須恵質土器	暗オリーブ灰色
3	表採	表採4		上師質土器	橙色、金雲母、赤色粒子、東側砂利層中、轟、平安時代
	表採			土師質土器	橙色、金雲母、白色赤色粒子、底部糸切り
	表採	表採5		磁器	明緑灰色、口縁部～底部
	表採	表採9		石板	黒色
1	河中			陶器	褐色、擦り鉢
1	河中	表採1		上師質土器	橙色、金雲母、口縁部
3	表採			土師質土器	橙色、石英
3	表採			土師質土器	明赤褐色、石英、口縁部
3	表採			土師質土器	明赤褐色、赤色粒子
3	表採			土師質土器	明褐色、金雲母、石英、東側砂利層
	表採			黒曜石	3点
	表採			陶器	灰白色、口縁部
	表採			磁器	灰白色、底部
	表採			磁器	灰白色、口縁部
	表採			陶器	淡黄色
1	表採			陶器	灰白色
	表採			陶器	黄灰色、常滑窯
	表採			土師質土器	にぶい褐色、赤色粒子
	表採			土師質土器	暗灰黄色、石英
	表採			土師質土器	オリーブ黒色
3	表採			打製石斧	西側旧河道の中から出土
	表採	表採7		陶器	染め付け
	表採	表採8		陶器	染め付け
2	表採	表採3		陶器	灰白色、底部、砂利層中
1	表採	表採2		須恵質土器	灰白色、河中

## 第4章 仲田遺跡出土骨歯の同定

パリノ・サーブェイ株式会社

### 1. 試料

同定対象は、中世の水田を切って流れる旧河川（近世？）から出土した、獸骨や歯計9点である。各試料は、河川内の砂礫層を中心に、散在して出土した。

### 2. 方法

ルーペを用いて観察を行い、種名や部位を同定した。なお、同定は早稲田大学金子浩昌先生にお願いした。

### 3. 結果

同定結果は、表1にした。

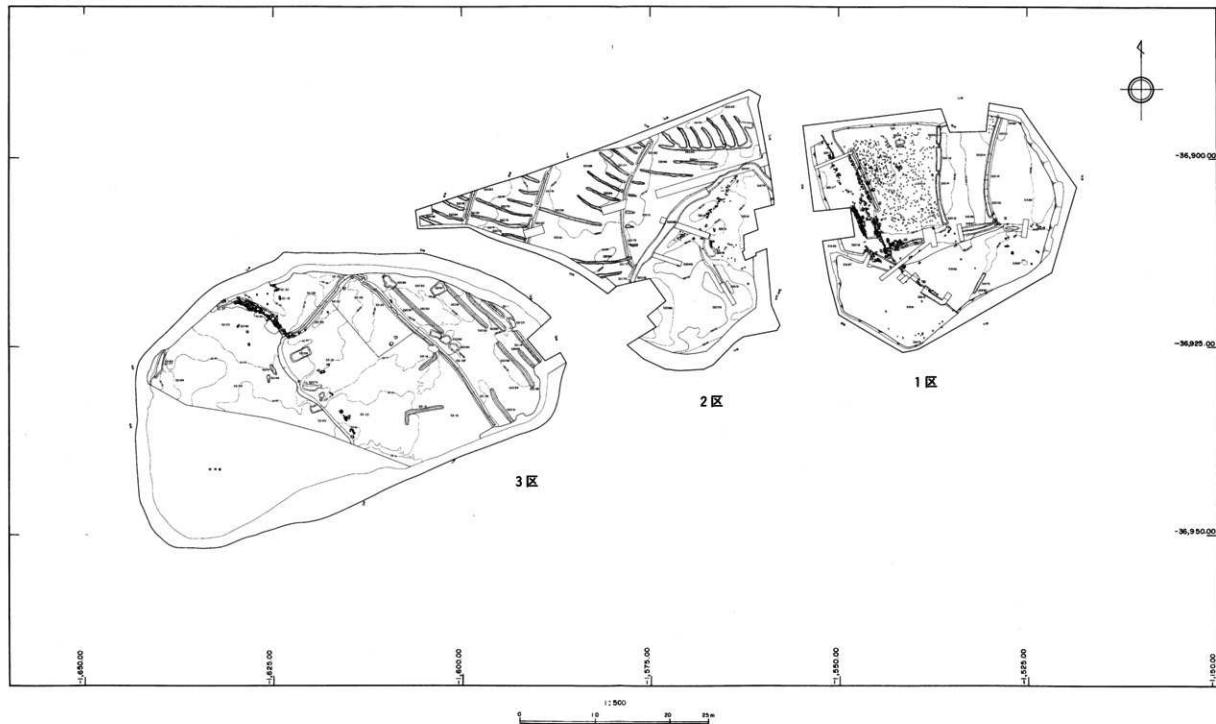
表1

試料番号	出土位置など	種類・部位
1	記載なし	ウマ／ウシ：肋骨2・四肢骨1
2	2区 HK9 99.7.12	ウマ：中手／中足骨1・他骨片多数
3	1区 HK1 99.6.11	ウマ：下顎左大臼歯M2
4	1区 旧河道	ウマ／ウシ四肢骨片
5	2区 HK10 99.7.12	骨ではない（木材？）
6	2区 HK14 99.7.16	ウマ／ウシ四肢骨片
7	3区 砂利上面	ウマ／ウシ臼歯片
8	3区 HK24 99.8	ウマ／ウシ：距骨片他の破片多数
9	3区 HK96 99.10.12	ウマ：臼歯片

今回の試料は、旧河川（近世？）内の砂礫層から出土した獸骨や歯であり、分布も散在していたという。9試料中木材の可能性が大きい試料番号5を除くと、いずれも獸骨あるいはその歯であり、確認できた部位は、断片的である。

ウマは試料番号3（下顎左大臼歯）と試料番号9（臼歯片）の歯2点の他に、中手／中足骨（試料番号2）がみられた。また、ウマかウシかはっきりしないが、肢骨・肋骨・臼歯片などがみられた。そのうち、試料番号1は土壤ごと大きく切り取られていたため、肋骨2本が密接して並び、これと角度をもって肋骨1本のある様子を確認できた。河川内へのウマ／ウシの埋葬などが想像されるが、保存状態が悪く確認された部位も限られていることから、詳細は不明である。

## 仲田遺跡

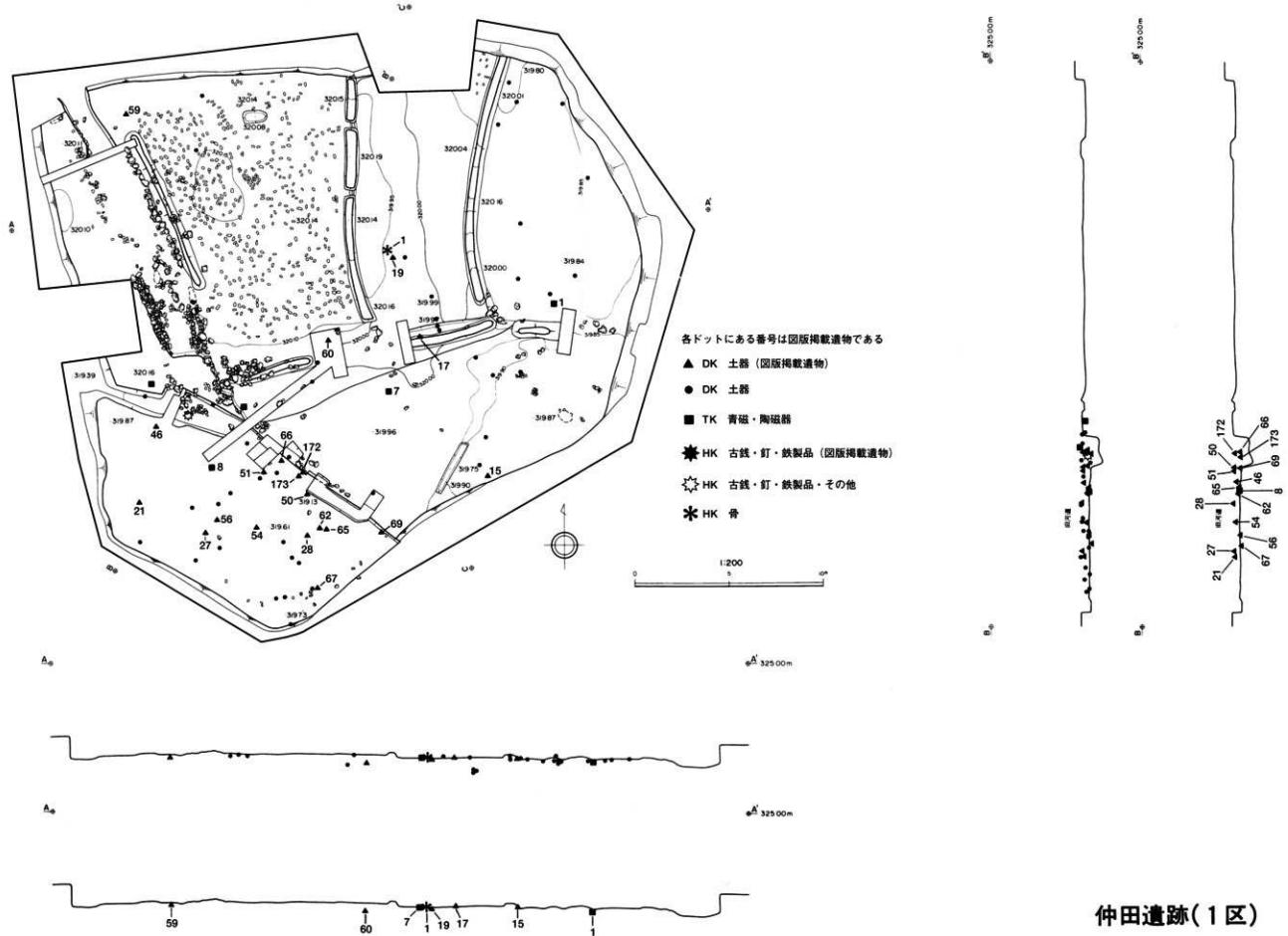


1区・2区・3区全体図 (1/500)

## 仲田遺跡(1区)

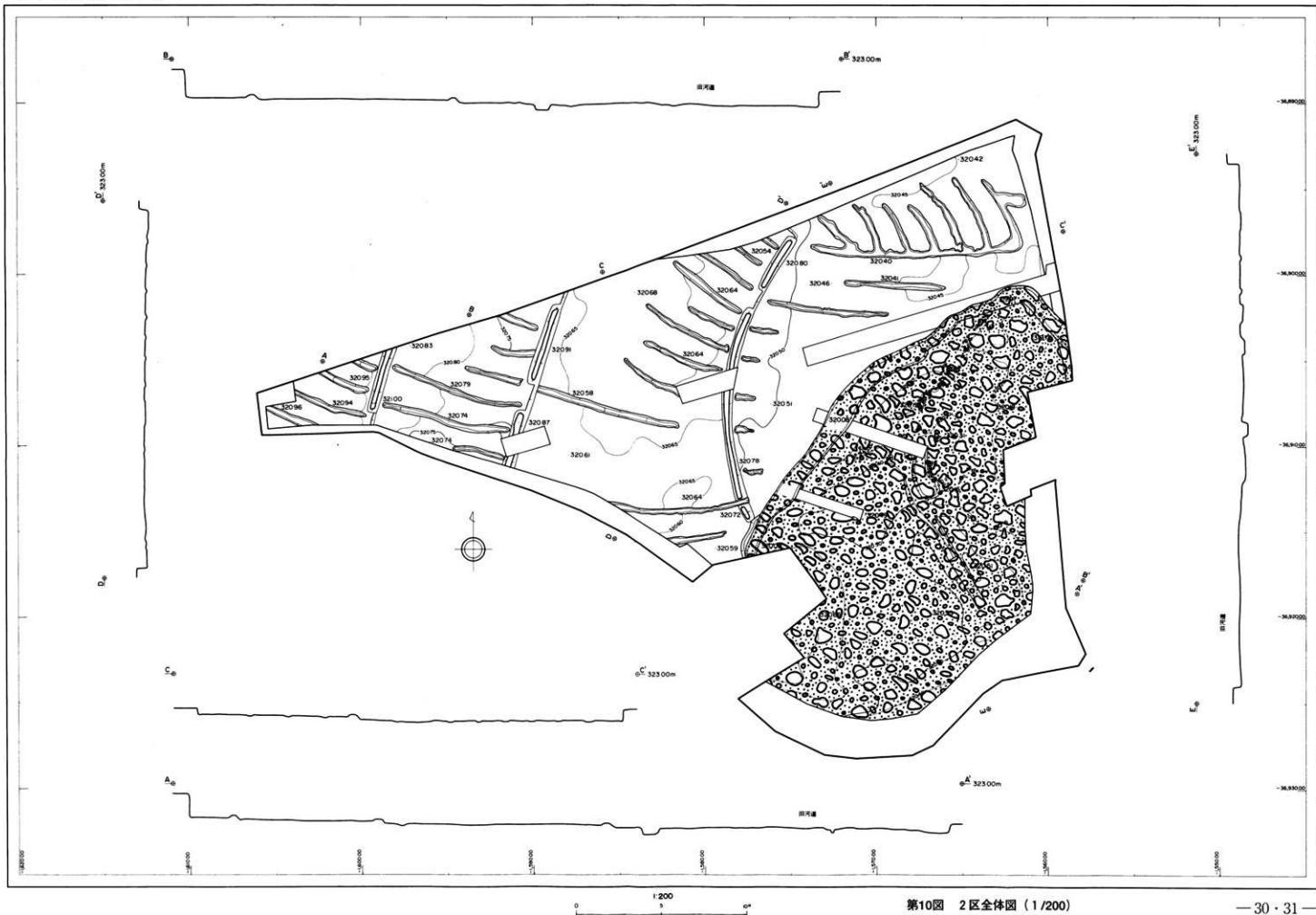


第8図 1区全体図 (1/200)



第9図 1区出土遺物位置図 (1/200)

仲田遺跡(2区)



第10図 2区全体図 (1 / 200)

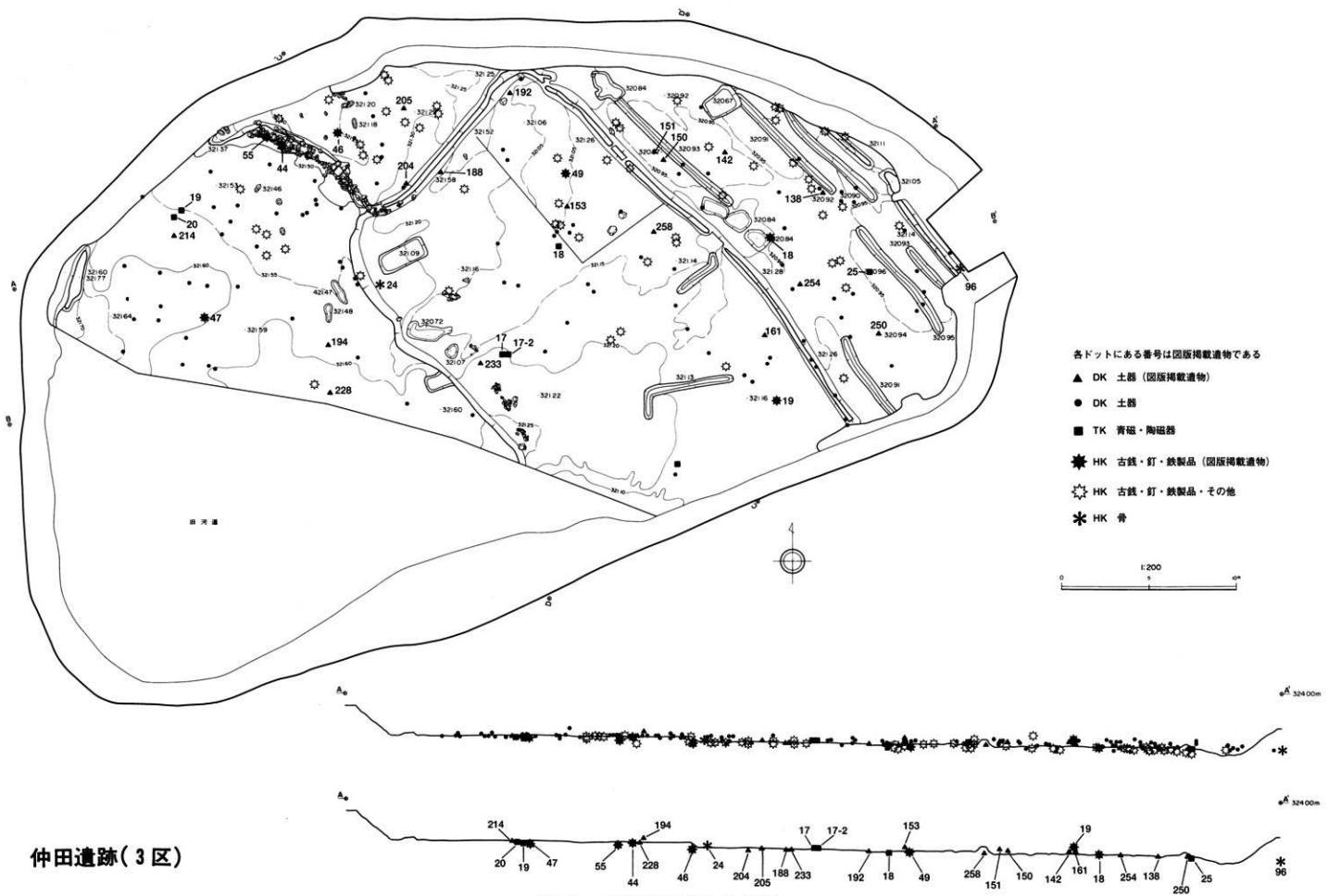


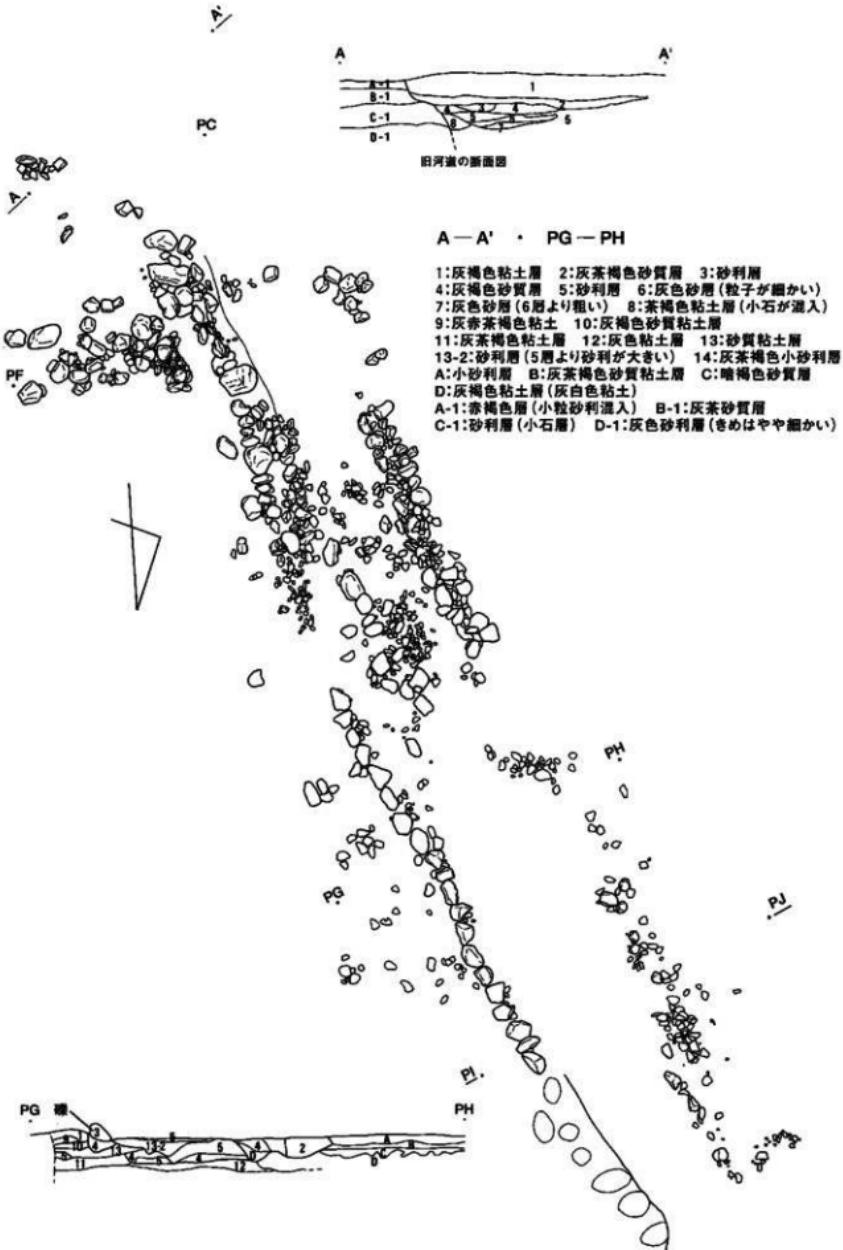
仲田遺跡(2区)

仲田遺跡(3区)

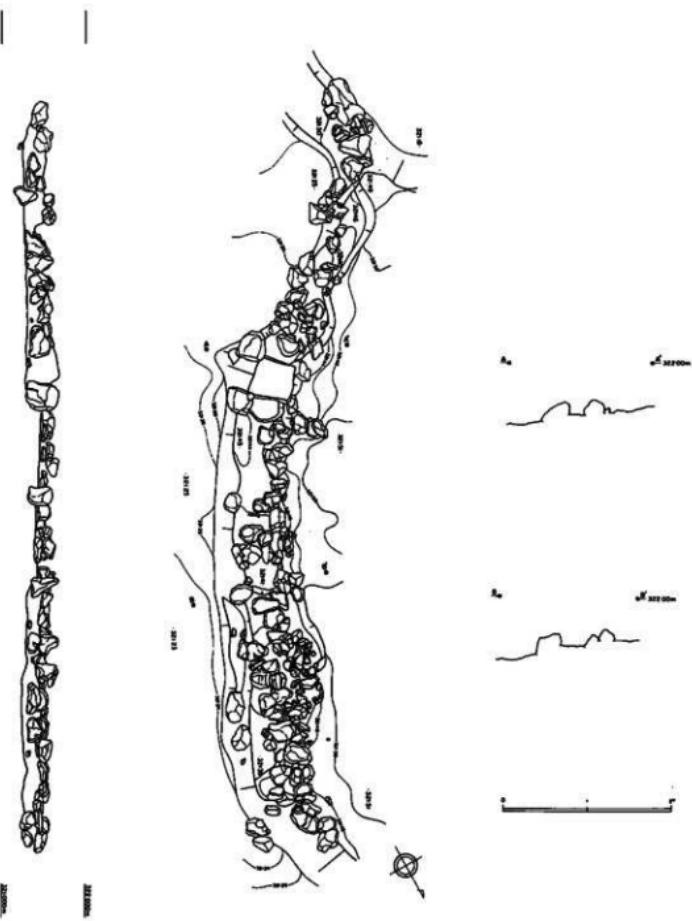


第12図 3区全体図 (1 / 200)





第14図 1区石列をともなう道（1/80）と断面（1/60）および旧河道の断面図（1/60）



第15図 3区西側の構造平面図・見通し図および断面図 (1/60)

## 第5章 仲田遺跡を構成する堆積物の岩石鉱物組成

山梨文化財研究所 河西 学

はじめに

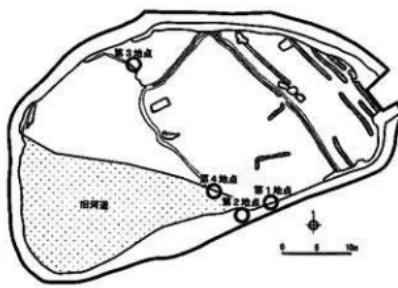
御勅使川扇状地は、巨摩山地から流出した御勅使川が甲府盆地に向かって形成した大きな扇状地である。仲田遺跡は御勅使川扇状地上に位置し、遺跡からは中世の水田跡とそれを覆う寛永通宝・文久永宝などを包含する近世堆積物などが検出されている。御勅使川現流路は割羽沢と合流後赤山北側の堀切を経由して釜無川へ流入する。御勅使川にはそれ以前、白根将棋頭付近で南に分流する前御勅使川（南御勅使川）と称される流路が存在していた。仲田遺跡の位置する低地は、赤山北側の堀切に流路が固定される以前の現御勅使川の谷底平野あるいは旧流路として考えられる。さらにこの低地は、割羽沢の旧流路であった可能性も考えられる。河川堆積物は上流域の地質を顕著に反映する特徴をもつ（河西,1989）ことから、今回河川流路変遷の解明を目的として、仲田遺跡の堆積物の岩石鉱物組成を明らかにしたので、以下に報告する。

### 試料・分析方法

仲田遺跡内の堆積物を8点採取した(第1表・第1図)。さらに比較試料として割羽沢・御動使川河川堆積物を採取した(第2図・第1表)。堆積物試料は、分析篩(#160、#250)を用いて粒径1~16mmの粒子を篩別し、エボキシ樹脂で包埋後、岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルチ亞硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレートとした。岩石鉱物成分のモード分析を次の方法で行なった。偏光顯微鏡下において、オートマチックポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッ

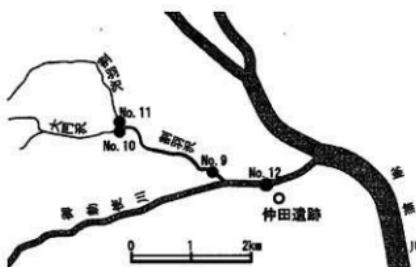
第1表 試料表

試料番号	採取地点
No. 1	仲田遺跡 第1地点(文久水宝包含層)
No. 2	仲田遺跡 第2地点(最上位礫層)
No. 3	仲田遺跡 第3地点No. 1
No. 4	仲田遺跡 第3地点No. 2
No. 5	仲田遺跡 第3地点No. 3
No. 6	仲田遺跡 第3地点No. 4
No. 7	仲田遺跡 第3地点No. 5
No. 8	仲田遺跡 第4地点(下位礫層)
No. 9	割羽沢 真葛橋上
No. 10	大門沢 西側大橋上流
No. 11	割羽沢 西側大橋上流
No. 12	御動使川 摺切橋上流

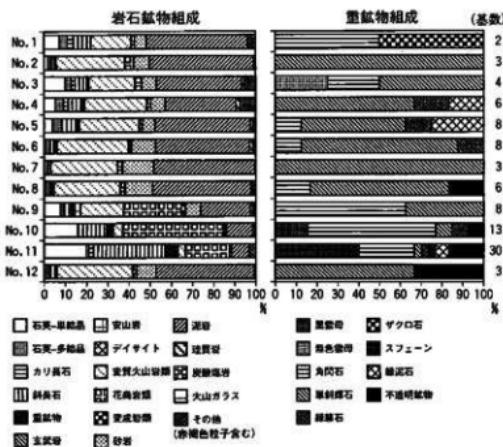


第1図 試料採取位置（遺跡内）

第2表 堆積物試料中の岩石鉱物  
(数字はポイント数。十は計数以外の検出を示す)



第2図 河川砂試料採取位置



第3図 岩石鉱物組成

チを薄片長辺方向に0.66mm、同短辺方向に0.40mmとし、各薄片で500ポイントを計測した。計数対象は、粒径0.05mm以上の岩石鉱物粒子である。

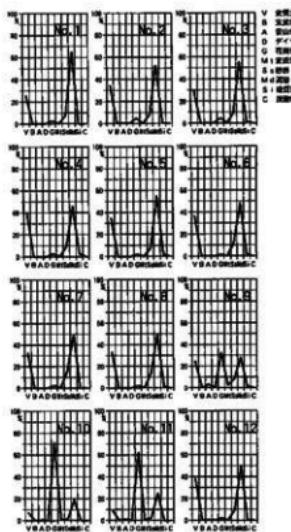
#### 分析結果・考察

分析結果を第2表に示す。砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を第3図に示す。重鉱物組成では右側に基數を表示した。岩石組成折れ線グラフを第4図に示す。この折れ線グラフは、変質火山岩類・玄武岩・安山岩・デイサイト・花崗岩類・変成岩類・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩のポイント総数を基數とし、各岩石の構成比を示したものである。

クラスター分析の樹形図を第5図に示す。クラスター分析は、第4図と同様のデータを用い、非類似度はユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出した。第5図は、今回分析試料と、甲府盆地から八ヶ岳南麓地域の河川堆積物などの分析結果と比較した(河西, 1989; 河西ほか, 1989)。

以下に岩石鉱物組成の特徴について述べる。

仲田遺跡内で採取したNos.1~8は、岩石鉱物組成において泥岩・変質火山岩類・砂岩などから主として構成される点できわめて類似性が高い。細粒~極細粒砂から構成されるNos.1, 3, 4, 5では、石英・斜長石・カリ長石などがやや多い傾向がある。緑色変質した変質火山岩類が各試料とも多く含まれている。花崗岩類はきわめて少ない。重鉱物の含有率もきわめて少なく、重鉱物組成では単斜輝石が多い傾向がある。第5図では、御勅使川No.12・流



第4図 岩石組成折れ線グラフ

沢川Nos.3,18などとともにクラスター1aを形成している。

大門沢を含む割羽沢水系の堆積物Nos.9~11は、花崗岩類が多い特徴をもち、御動使川や仲田遺跡試料とは異なる。変質火山岩類・泥岩・砂岩などを少量伴い、また割羽沢Nos.9,11では安山岩が認められる。重鉱物組成では角閃石が多く、Nos.10,11では黒雲母も多い。第5図では、No.9が釜無川河川砂とともにクラスター2に、Nos.10,11が笛吹川水系試料とともにクラスター3に属する。

御動使川堆積物No.12は、変質火山岩類・泥岩・砂岩などの岩石から主として構成される。変質火山岩類では緑色変質火山岩類が多いこと、石英・カリ長石・斜長石・重鉱物が少ないこと、クラスター1aに属することなど仲田遺跡試料との類似性が高い。

以上の結果から次のことが明らかになった。割羽沢と御動使川との河川砂の岩石鉱物組成は明らかに異なる。仲田遺跡の堆積物は御動使川の組成と極めて類似性が高い。従って仲田遺跡内の堆積物は、ほとんどが御動使川によって形成された可能性が高く、割羽沢のみの堆積作用によって形成された可能性はきわめて低いと推定される。

流路が堀切に固定される以前の御動使川は、赤山の南を迂回する仲田遺跡の位置する低地を流れていって、赤山から能蔵池東側に連続する崖線を越えて、それ以東の釜無川沖積低地上に崖線付近を扇頂とする小扇状地を形成している（河西,2000）。

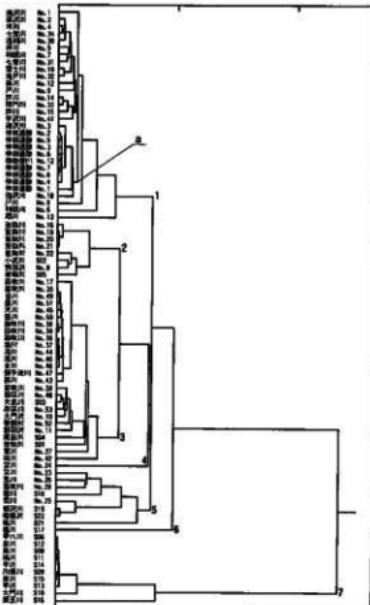
大門沢合流後の割羽沢は、御動使川扇状地と竜岡台地との境界を流れしており、その延長としてかつて仲田遺跡の位置する低地を流れていた可能性は否定できない。しかし仲田遺跡の堆積物中からは御動使川の堆積作用の痕跡のみが検出され、割羽沢流域の堆積物の影響はほとんど見いだされなかった。割羽沢の流域面積は御動使川のそれに比較してきわめて小さく巨摩山地東麓には大門沢や御坊沢などによる扇状地を既に形成しており、大門沢合流後の割羽沢の堆積作用は御動使川に比してかなり小規模であったと推定される。日常的な流水量とは別に洪水時の堆積作用は御動使川の影響がきわめて強いことを示しているものと考えられる。

## 註

註1) ここではデイサイト・流紋岩を含む珪長質火山岩の総称としてデイサイトを使用する。

## 文献

- 河西学 (1989) 甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成-土器胎土分析のための基礎データー。『山梨考古学論集Ⅱ』、505-523。
- 河西学 (2000) 石橋北屋敷遺跡周辺の地形環境。『石橋北屋敷遺跡』、山梨埋蔵文化財センター調査報告書、第178集、103-106。
- 河西学・櫛原功一・大村昭三 (1989) 八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、第1集、1-64。



第5図 堆積物試料のクラスター分析樹形図

## 仲田遺跡の水田について

1区から3区までで確認された水田は10枚、そして畦は10本が確認されている。その中でも明らかに壊されたと考えられる5本の畦が存在している。

本遺跡は、御動使川によって形成された扇状地上に立地し、度重なる水害を受けた土地である。水田の床面上には40cm以上の砂や砂利が堆積していた。このことから、畦は洪水等による水害によって壊されたものと考えていたが、このことは必ずしも洪水によるためだけではないようである。それは、水田面全体に堆積していた砂や砂利が、水の勢いによって畦を壊したと考えるならば、1区（第8図）の中央に存在する畦は2箇所壊されているものの、その東につくられた畦は壊されてはいない。もし洪水によるものであればやはり同様な状況で壊されていなければならず、壊された畦の場所だけ水の勢いが強かったとは考えがたい。これはむしろ洪水によるものではなく、水田に蓄えられた水を下方へ流し出す（水戸払い）施設と考えられ、水田に蓄える水を必要としなくなつた時期に畦を切ったものと思われる。このことは、2区（第10図）についても同様なことが言えそうである。2区では、中央の水田の東西につくられた畦で、この畦はそれぞれ一箇所壊されている。水害の規模はかなり大きかったものと考えられるのであるが、畦が切られている場所が流路と異なつた箇所に存在している。

しかし、3区（第12図）で確認された長い畦では、ほぼ中央が破壊されている。写真図版3でも明らかであるように、洪水によってもたらされた砂・砂利の流れを見ても南西から北東へ連なつており、段差を有する水田面には、大形の疊が散布しているとともに、この段差をもつ箇所のはば中央の水田面では、床面が水流によってえぐられている。このことは、洪水の規模を示すものと思われ、特に3区の畦が壊された理由としては、「水戸払い」によってなされたものとは言い難い。

水田面に残された足跡については、明瞭に残された2・3区の水田では、稻刈りの時期に降雨によって水がたまり、その中で稻刈りがなされたために残された足跡ではないかと考えられる。実際、発掘調査において降雨があった後、水田に溜まつた雨水がなくなるまでかなりの時間を要し、雨水を掃きだす為に床面を歩くと非常に軟らかく、足跡が浅く残るような状態であった。

また足跡の残存状況から、2区（写真図版2）と3区（写真図版3）東側床面の溝状に形成された足跡の水田面は、多少前後があるかもしれないが同じような状況下の日に稻刈りが想定され、溝状の足跡が残されていない1区全面と3区の中央床面については、2区および3区東側床面より前後した、しかも晴天が続き水田面が湿っていない状態の時に稻刈りが行われたと考えられる。そして水田面に残された足跡の列から、稻はほぼ直ぐに植えられた条植えのものと思われ、足跡の溝から溝までの間に稻は4～5本程植えられたものと考えられる。

ここでは稻刈りの想定述べるが、足跡の方向や向きから稻刈りは横向きに移動して行われたものと思われる。このことは、写真図版2・3のように、畦に沿つて横方向に進んだ一列の足跡とその後に残された二列の足跡の存在である。畦際については一列であり、この場所が最初の段階か最終の段階か不明であるが、刈り取りの状況を想起させるものであろう。

また、当時の人が右利きとして考えた場合、右方向へ移動して刈り取りが行われたものと考えられる。そして刈り取りは、手前の稻株の2列ないし3列の2～3株を刈り、右方向へ移動しながら畦までまたは稻株の列（例えば、2区の東側の水田について言えば畦が曲線を描いていることから、田植えも畦によって方向を違え、刈り取りによってできた足跡はこのことによって方向を異にしたものと考えられる）まで移動し、そして方向転換を行つて刈り取りがなされたものであろう。田植えの方法としては条植がなされ、稻刈り方法は条植に沿つた刈り取りがこの時期に行われていたものと思われる。

県内で発掘調査された中世の水田遺跡には、二本柳遺跡（註1）、大師東丹保遺跡I区・II区・III区・IV区（註2）、古婦毛遺跡（註3）があげられる。二本柳遺跡では、一辺2.4m～3.0mの方形ないし長方形を呈するものが多く、中には長軸が4m以上の規模の大きいものも存在する。出土遺物から16世紀後半に位置付けられているが、中には江戸時代の18世紀まで続いたものも存在している。大師東丹保遺跡I区では三面まで調査され、第1面が

鎌倉時代の13世紀後半から14世紀前半を中心とする水田遺跡である。畦畔の一辺が11m～15mの規模であり、畦畔の幅は約40～80cm、残りの良い箇所では約15～20cmの高さがある。またⅢ区では、一辺が12m～17mとやや大きめであるが、鎌倉期の水田規模が10m～20m以内の規模にあることを、新津氏は指摘している。Ⅳ区では、鎌倉時代の一辺15m程の区画の大きな水田が調査されている。

古婦毛遺跡では、一段高く足跡がない箇所があり、水田跡と見なすことはできないと報告されている。また周辺（12区）からは16世紀後半の遺物が出土していることから、水田に近接する足跡のないこの場所は、16世紀後半に近似する時期のものと思われる。特にこの場所では、水田と区別する境界は畦による施設ではなく段差によるものであり、このことは仲田遺跡の1区および3区に共通するものである。

仲田遺跡では、幅の狭い水田では6m幅×13m以上、10m幅×13m以上（1区）、8m幅×11m以上、13m幅×18m以上、幅あるいは長さが16m以上の水田がつくられている（2区）。3区では、9m幅×27m以上、12m幅×27m以上の水田である。本水田も規模には大小が認められるが、新津氏（註4）が指摘するようにおよそその規模が10m～20mに相当するものの、地形および場所によって水田の規模は左右されるものと思われ、また古婦毛遺跡と共通する遺構の確認から仲田遺跡も中世の16世紀後半頃と考えたい。

本遺跡の洪水による氾濫の時期としては、稻刈りが終わった後と想定される。また水田が機能していた頃の時期は中世で、遺物の時期からすると16世紀後半頃に比定される。この洪水の氾濫源は、現在の位置に流れる御勅使川で、河川堆積物の分析により明らかにされており（第5章 河西）、水の得やすい場所に水田がつくられるところから、御勅使川から水路を引き用水としたものと思われるが、今回の調査では水路は確認されなかった。

また中世のこの時期には、各種の開発事業があったものと考えられ、水田開発・河川改修工事・山林の木材伐採等が行われていたものと思われる。水田開発に付属するものとして水路や苗植えの方法、河川改修工事としては護岸、木材の伐採は堤防を築くためや家屋・橋、あるいは水路構築のためや木製品の製作等が考えられる。

県内で発掘調査された「古婦毛遺跡」では、ほぼ仲田遺跡と同時代と考えられる水田跡の調査が実施され、極めて本遺跡と状況が近いことがあげられる。この遺跡の報告書中で、「16世紀末を境に、これ以前の中世では土石流をもたらすような出水が多く、これ以後の近世以降は土石流をもたらすような出水はなかった。」と村石氏は考察しており、その理由として「遺跡の南東250mの扇状地上に館跡がある岩崎氏は、守護武田氏と守護藤部氏の戦いの折りに滅亡しており、この戦いに関連して館を防備するために、樹木の伐採など大規模に自然環境の改変を行っている可能性が高い」と指摘している。そして「こうした自然環境の改変の結果として、中世には土石流をもたらすような出水が多かった可能性が高い」としている。

特にこの時期、中世において山梨県内では、出水による洪水が広範囲に認められている。大泉村誌（註5）によると、「北巨摩は永禄三年（1560）と六年に釜無川を中心に大水害に見舞われた。」そして「特に元亀元年（1570）には豪雨のため、八ヶ岳に崖崩れが起こり、押し出された土砂は渦流となり、塩川、釜無川を鉄砲水となって押し下り、竜王村を呑み、荒川を抜け、甲府盆地は七部どおり水浸しとなった。四年後の天正二年には史上最大の水害が訪れた。天正二年（1574）は甲斐国全域に渡って大災害にあった年である。本村も八ヶ岳の山崩れによって大灾害を被っている。」と記載されている。この天正の水害は、「明治三十一年の水害以上の災害ではなかろうか」と記載され、水害の規模が大きかったことを物語るものである。

「古婦毛遺跡」では、館の防備のための樹木の伐採など大規模な自然環境の改変が行われた可能性が高いことがあげられ、このことによって土石流をもたらすような出水が多かった可能性が指摘されており、北巨摩地域についても八ヶ岳山麓の樹木等の伐採がかなり行われていたことが想像されるのである。このことからも、中巨摩郡の山沿いの場所においても、山林等の伐採が行われていたものと考えられる。

仲田遺跡から出土した獸骨は、第4章の同定結果からウマの骨および臼歯とウマないしウシの骨・臼歯が確認されている。ほとんどの骨や臼歯は、江戸時代の後半頃に形成された旧河道からの出土で、骨などもまとまって形をなすものではなく、バラバラの状況で確認されたものである。水田から出土した骨や歯については、水田面の上層に堆積した砂や砂利層の中から洪水とともに流れてきたものと考えられる。本遺跡の西隣「石橋北屋敷

遺跡」(註6)では、戦国時代頃に造られたと考えられる区画溝から、ウマの下顎骨が2頭分並んで出土している。そして骨の周辺には溝の中へ石が詰められており、溝を埋める際に何らかの祭祀が行われていたものと考えられている。

このことは、本遺跡の周辺、例えば洪水のような突発的な自然現象によって石橋北屋敷遺跡で埋葬されたウマの骨や歯が、仲田遺跡にもたらされた可能性や、または河川の中で動物の解体などが行われ、埋葬されたものが本遺跡にもたらされたものかは不明であるが、本水田に関する限り祭祀が行われた状況は確認されない。祭祀が行われたとするならば、水田の近くであり、集落が存在する近接の場所と考えられ、可能性としては「石橋北屋敷遺跡」で行われていたものと思われる。

また、八田村でウマやウシの骨が確認された遺跡は、本遺跡と「石橋北屋敷遺跡」の2遺跡であるが、1999年度に調査が実施されている白根町「百々遺跡」(註7)では、多数の馬や牛の骨が見つかっている。このようなことから、八田村から白根町にかけて「牧」の存在が大きく浮上した。磯貝正義氏(註8)は早くから「牧」の存在を意識しており、「白根方面にあったのが八田牧」とし、天福元年(1233)当時には八田御牧の存在が確認されていることを指摘している。このことから八田牧の存在は、平安時代以降には「八田牧」が存在していることを考察している。

本遺跡は16世紀後半頃の水田跡で、遺跡から南に存在する(北側では御動使川のため集落は形成されない)場所にこの時期の集落が存在しているものと思われる。本遺跡の南に位置する場所に能蔵池があり、池畔には室町時代と推定される六角石鐘がある。また桃岳院は1584年開山したと言われ、長谷寺の本堂については1524年の建立である(註9)(第5図)。このように周辺には、室町時代から安土・桃山時代にかけての寺社が存在している。

そして、本遺跡に近接して「旧諏訪神社跡の碑」があり、由来書によると永禄四年(1561)の開基とされること、また古老の話によると「子供の頃には北側にある赤山に鳥居があった」こと、石列を伴う道が赤山の方向に延びていることを考えあわせれば、この石列を伴う道は参道として捉えられ、時代的にも室町時代につくられた道と考えられる。

(山本)

## 註

- 1 山梨県教育委員会 1992『二本柳遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第72集
- 2 山梨県教育委員会 1997『大師東丹保遺跡Ⅰ区』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第131集
- 3 山梨県教育委員会 1997『大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第132集
- 4 山梨県教育委員会 1997『大師東丹保遺跡Ⅳ区』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第133集
- 5 山梨県教育委員会 1997『古姫毛遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第142集
- 6 前掲2『大師東丹保遺跡Ⅰ区』 p71
- 7 大泉村 1989『大泉村誌(上)』「第一節 古代から中世までの災害」 p1123
- 8 山梨県教育委員会 2000『石橋北屋敷遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第178集
- 9 山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古学協会 1999年『1999年度上半期遺跡調査発表会要旨』
- 10 磯貝正義 1984『甲府盆地—その歴史と地域性』『甲斐源氏勃興の歴史的背景』
- 11 この中で氏は、八田牧は白根町・八田村から櫛形町の一部にかけて存在した牧であろうとしている。そして八田牧のほかはすべて平安時代にその存在が確認できる。甲斐源氏が土着するのは、12世紀前半であるが、これらの牧が、かれらの土着とその後の発展に極めて都合のよい土壤を提供したのである、と述べている。
- 12 山梨県教育委員会 1988『市川道』『西郡からの道』 山梨県歴史の道調査報告書第15集

# 写 真 図 版



1区 南法面 (右側は旧河道)



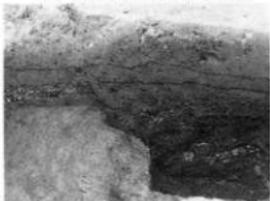
1区 石列をともなう道  
(南から北へ撮影)



1区 旧河道断面 (左側が旧河道)



1区 全体写真 (写真の上方が南: 右は 2 区: 写真中央に見えるのは足跡)



1区 右側が旧河道



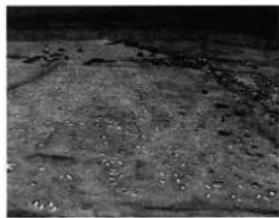
1区 踏査風景



1区 石列をともなう道 (北から南へ撮影)

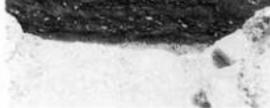


1区 足跡の調査



1区 足跡の状況

石列をともなう道の  
断面





2区 旧河道から出土した骨



2区 旧河道と水田の床（右が旧河道）



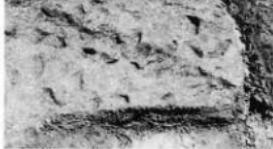
2区 水田を壊した旧河道の断面



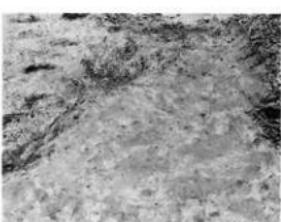
2区 足跡の列（東から西へ撮影）



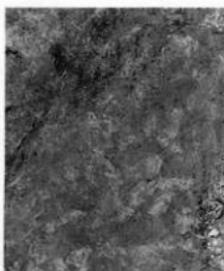
2区 全体写真（写真の上方が南：左が1区：右は3区：調査区の中央より南が3区から続く旧河道で蛇行しながら1区へ流れる）



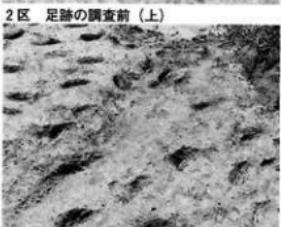
2区 西側隅の足跡の列



2区 足跡の調査前（上）



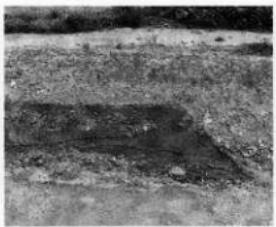
2区 足跡の調査前（左）と調査後（右）



2区 足跡の調査後（下）



3区 調査風景（西から東へ撮影）



3区 南法面（手前床面：幾度となく水害にあい、堆積した土砂を更に旧河道が流れた）



3区 砖の代用として砾が並べられている



3区 床面上の砂利（洪水跡）



3区 洪水で壊された砖



写真（左）の砂利を取り除いた状況



3区 東側の水田面と足跡の列



3区 砖の足跡（横から撮影）



3区 砖の足跡（上から撮影）



3区 2列になった足跡（斜め上から）



3区 水田跡（東から西へ撮影）



3区 縄の並び（手前が水田跡：奥は水田がつくられていなかった面）



3区 水田跡と縄



3区 手前が水田跡 縄は水田面側では縄に入れられている



3区 縄の状況



奥の縄は置かれた状態

3区 縄に入れられた縄の状況の断面



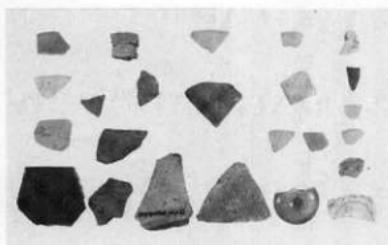
手前の縄は水田面にくい込む



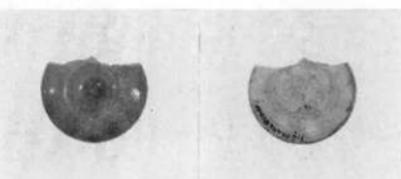
縄に入れられた縄の状況



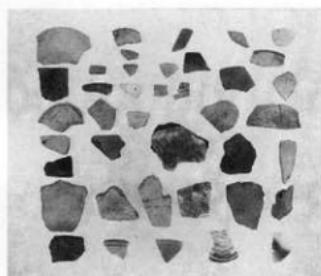
縄に入れられた縄と置かれた縄



1区 出土遺物 (第6図)



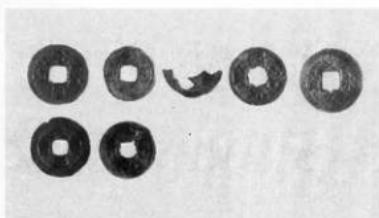
TK1 (第6図)



2区 出土遺物 (第6図)



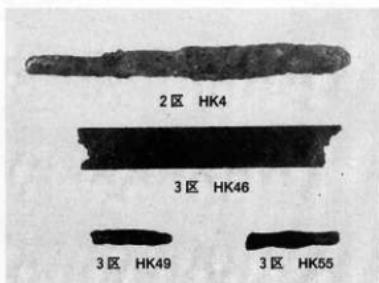
2区・3区 出土遺物 (第7図)



古銭 上段左からHK5・HK16・HK8・HK18・HK19  
下段左からHK44・HK47 (第7図)



古銭(裏面) 上段左からHK5・HK16・HK8・HK18・HK19  
下段左からHK44・HK47



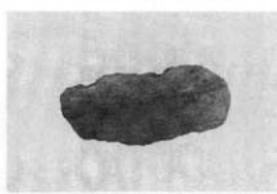
2区 HK4

3区 HK46

3区 HK49

3区 HK55

(第7図)



3区 旧河道出土 石斧 (第7図)

# 報告書抄録

ふりがな	なかたいせき
書名	仲田遺跡
副題	一般国道52号線改築・中部横断自動車道建設工事に伴う発掘調査
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第187号
著者名	山本 茂樹 湯川 修一
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 055-266-3016
印刷所	株式会社 アド井上
発行日	2001年3月31日
ふりがな	やまなしけん なかこまぐん はったむら やごしま
所在地	山梨県中巨摩郡八田村野牛島761外
2500分の1地図	韋崎・小笠原
位置 東經	138° 38' 54"
仲 位置 北緯	35° 40' 02"
田 位置 標高	320m
市町村コード	193361
調査原因	一般国道52号線（甲西道路）改築・中部横断自動車道建設工事に伴う事前調査
調査期間	1999年5月6日～1999年10月18日
調査面積	7,300m <sup>2</sup>
概要 中世	
種別	田畠
主な遺構	水田跡、道路
主な遺物	かわらけ、青磁片、古銭
特記事項	

